

# 『四庫全書総目提要』 朱子「詩集伝」 訳注

重野 宏一

凡 例

一、本稿は、文淵閣『四庫全書総目提要』巻十五、経部十五、詩類一に収められている朱子「詩集伝」の訳注である。

一、訳注の体裁は、「原文」「校勘」「訓読」「現代語訳」「注」から成る。本文は、筆者の判断で【一】～【七】に分け、章ごとに訳出した

一、原注については「」で示した。また、注において原文とともに割注を引用する際にも同様の方法を採った。

一、本文の底本には、阮元が杭州の文瀾閣に附された武英殿版『総目提要』に拠って刻した『欽定四庫全書総目』、いわゆる「浙江本」(『四庫全書総目』王伯祥断句、北京中華書局景印、一九六五年初版、一九八七年第四次印刷)を用い、以下の三点の版本と対校した。

①「文淵閣四庫全書」著録本のはじめに附された提要、いわゆる

る「書前提要」(台湾商務印書館景印、一九八三年)。

②「文淵閣四庫全書」に附された武英殿刻本『欽定四庫全書総目』(台湾商務印書館景印、一九八三年、以下「殿版」と略す)。

③同治七年(一八六八)、浙江本を重刻した広東書局重刊本、いわゆる「粤刻本」(『欽定四庫全書総目』台北藝文印書館景印、一九六九年、第三版を使用。なお、原田種成氏編『訓点本四庫提要』経部二、書・詩類、汲古書院、一九八二年も同版)。

また、対校の結果、若干の文字を改めた箇所もある。それらについては校勘において記した。

一、原文に見られる俗字、異体字、欠筆などはすべて正字体に改め、それらについては校勘で注記していない。但し、別字の場合、煩を避けず一々注記することとした。また、避諱字は原文、訓読ではそのまま残し、現代語訳において正しく示した。

なお、擡頭、平出については、いずれも反映させていない。

一、注における引用書名、篇名などについては、初出の場合は正名を記し、再出以後は誤解のないと思われる範囲で適宜省略した。

# 詩集傳 八卷 「通行本」

【一】宋朱子撰。宋志作二十卷。今本八卷、蓋坊刻所併。朱子注易、凡兩易稟。其初著之易傳、宋志著錄、今已散佚、不知其說之同異。注詩亦兩易稟。凡呂祖謙讀詩記所稱朱氏曰者、皆其初稟、其說全宗小序。後乃改從鄭樵之說。「案朱子攻序用鄭樵說、見於語錄。朱升以爲用歐陽修之說、殆誤也。」是爲今本。卷首自序、作於淳熙四年、中無一語斥小序。蓋猶初稟。序末稱時方輯詩傳、是其證也。其注孟子、以柏舟爲仁人不遇、作白鹿洞賦、以子衿爲刺學校之廢。周頌豐年篇、小序辨說極言其誤。而集傳乃仍用小序說、前後不符。亦舊稟之刪改未盡者也。楊慎丹鉛錄、謂文公因呂成公太尊小序、遂盡變其說。雖意度之詞、或亦不無所因歟。自是以後、說詩者遂分攻序宗序兩家、角立相爭、而終不能以偏廢。

## 〔校勘〕

- ① 書前提要是、前に「臣等謹案」を附す。
- ② 書前提要ならびに殿版は、「註」に作る。
- ③ 殿版には、「著」字が無い。
- ④ 書前提要ならびに殿版は、「註」に作る。
- ⑤ 書前提要是、「于」に作る。
- ⑥ 書前提要ならびに殿版には、「用」字が無い。
- ⑦ 書前提要是、「脩」に作る。
- ⑧ 書前提要には、「殆」字が無い。
- ⑨ 書前提要是、「于」に作る。
- ⑩ 書前提要ならびに殿版は、「註」に作る。
- ⑪ 書前提要是、「辯」に作る。
- ⑫ 書前提要ならびに殿版は、「臆」に作る。

## 〔訓読〕

宋 朱子の撰。宋志に二十卷に作る。今本八卷なるは、蓋し坊刻の併す所ならん。朱子 易に注するは、凡そ両たび稿を易ふ。其の初著の易伝は、宋志に著録するも、今已に散佚し、其の説の同異を知らず。詩に注するも亦た兩たび稿を易ふ。凡そ呂祖謙の讀詩記に称する所の朱氏曰はくなる者は、皆な其の初稿にして、其の説は全く小序を宗とす。後乃ち改めて鄭樵の説に従ふ。「案

ずるに朱子序を攻むるに鄭樵の説を用ふるは、語録に見ゆ。朱升以て歐陽修の説を用ふと為すは、殆んど誤りならん。」是れを今本と為す。巻首の自序は、淳熙四年に作るも、中に一語も小序を斥くる無きは、蓋し猶ほ初稿なればならん。序の末に時方に詩伝を輯むと称するは、是れ其の証なり。其の孟子に注するに、柏舟を以て仁人の不遇と為し、白鹿洞の賦を作り、子衿を以て学校の廢るを刺ると為す。周頌の豊年篇、小序辨説は極めて其の誤りを言ふも、而るに集伝には乃ち仍ほ小序の説を用ゐ、前後符せず。亦た旧稿の刪改すること未だ尽くさざる者なり。楊慎の丹鉛録に、文公 呂成公の太だ小序を尊ぶに因りて、遂に尽く其の説を變ずと謂ふ。意度の詞と雖も、或いは亦た因る所無からざるか。是れ自り以後、詩を説く者遂に攻序・宗序の両家に分かれ、角立相ひ争ひて、終に以て偏廢すること能はず。

#### 〔現代語訳〕

宋、朱子の撰。『宋史』芸文志では二十卷とする。現在の通行本が八卷であるのは、おそらくは書肆が合わせたものだからであろう。朱子は『易』に注を書くとき、およそ二度稿を改めている。彼が初めて著わした『易伝』は、『宋史』芸文志に著録してあるが、現在ではすでに散佚しており、その説の異同は判然としない。

『詩』に注を書くときにも同様に二度稿を改めている。およそ呂祖謙の『呂氏家塾讀詩記』において「朱氏曰はく」とあるものは、いずれも『詩』の注釈の初稿であり、その説はまったく小序を尊重している。のちにそれを鄭樵の説に拠つて改めている。「おも」に、朱子が詩序を責める際に鄭樵の説を用いたということは、『朱子語録』のなかに見えている。したがって、朱升が歐陽修の説を用いていたとするのは誤りであろう。」これが今本『詩集伝』である。その巻首の自序は、淳熙四年（一一七七）としているが、その序文中には一語たりとも小序を排斥する記述が無いのは、やはりそれが初稿だからなのであろう。自序の末尾に「この時ちようど『詩伝』を編輯した」と述べているのが、その証拠である。朱子は『孟子』に注を書き、そこで「柏舟」を仁人の不遇を詠じた詩であると説き、「白鹿洞の賦」を作り、そこで「子衿」を学校が廢れたことを風刺した詩であるとした。その一方で周頌の「豊年篇」において、『小序辨説』は詩序の誤りについて甚だ強く述べているが、『詩集伝』では依然として小序の説を用いており、これでは前後が一致しない。これもやはり旧稿の改訂がまだ十分に尽くされていないからなのである。これについて、明、楊慎の『丹鉛録』には、「朱文公は呂成公が小序を尊重し過ぎたために、ことごとくその詩説を改めるに至ったのである」と説いてい

る。これは推測の言ではあるが、やはり何かしら根拠とするものがあるであろう。これより以後、『詩』を説く者は、そのまま詩序を排斥する者と尊重する者の両家に分かれ、互いに厳しく論争を繰り広げたが、結局は詩序をすべて廃するには至らなかったのである。

## 〔注〕

(一) 詩集傳 八卷 『詩集伝』の版本には、大きく分けて二十卷本と八卷本の二つの系統がある。二十卷本は、宋元版に多く見られ、現在で最も通行しているのが、わが国、静嘉堂文庫所蔵の宋版『詩集伝』（嘉定・紹定年間刊、清、袁廷禱、陸心源旧蔵、『四部叢刊』第三編「経部」、上海商務印書館景印）である。但し、この版本は、清の陳鱣が「宋本詩集伝跋」（『簡莊文鈔』卷二）において述べるように、卷十二、小雅「蓼莪」三章の朱伝「則無所恃」の四字より卷十七の大雅までが亡佚しており、後人がそれを補抄した残欠本である。その他、詳しい書誌については『静嘉堂文庫宋元版図録 解題篇』（汲古書院、一九九二年）を参照。また、同版が南京図書館にも蔵されており、近年『中華再造善本』（唐宋編「経部」、北京図書館出版社景印、二〇〇六年）に収められたが、こちらも卷一から卷八までを存

する残欠本である。したがって、現在完全な形で宋版は存在していないことになる。元版についてもそれほど多くは確認されていないが、台湾の国立中央図書館が元刻二十卷本を蔵している。なお、これとは別系統であるが、国家図書館蔵、元刻十卷本が『中華再造善本』金元編「経部」（同出版社景印、二〇〇四年）に収められている。さらに、明代においても二十卷本は刊行されており、正統十二年（一四四七）刊「司礼監刻本」、嘉靖三十五年（一五五六）刊「崇正堂刻本」などが存する。

これに対して八卷本は、明の中頃から清代にかけて通行したもので、宋、元版には全く見られない。最も早い時期のものとしては、嘉靖年間に福建監察御史であった吉澄が刊行した「吉澄刻本」がある。これ以後、武英殿本、四庫全書本、監本、石印本などはいずれも八卷本に基づいている。わが国の和刻本も二十卷本である『官版詩集伝』（天保年間刊）を除き、たとえば、新刻、再刻と幾度となく刊行され、最もよく知られた版本である『頭書詩経集註』（寛文四年刊、寸雲子松永昌易註、尋思斎鈴木温校、今村八兵衛蔵板）など、そのほとんどが八卷本である。また書名はひとえに『詩経集伝』とするものが多く、『提要』が八卷通行本としながらも、『詩集伝』とするものには疑問が残る。内容の差異について、八卷本は経文の文字や伝注

の訓詁、文義において、二十卷本と較べて大きな異同は見られない。しかし、八卷本には二十卷本にあった反切、とりわけ叶音説による音注を直音の音釈に変更しているという大きな相違がある。これがいったい誰の手によるものなのかは未詳である。

(二) 朱子 朱熹(南宋、高宗、建炎四年(一一三〇)〜寧宗、慶元六年(一二〇〇))。字は元晦、あるいは仲晦、晦庵と号し、別に紫陽、考亭、新安などと号した。南劍尤溪(現在の福建省)で生まれた。祖籍は徽州婺源(現在の江西省婺源)であり、徽州は新安郡の別名があることから新安の人と名乗った。父は朱松(一〇九七〜一一四三)。紹興十八(一一四八)年、十九歳のとき進士に及第して同安県の主簿となったが、在任四年にして官を退き、郷里に帰って学問につとめた。のちに程顥、程頤の学統を引く李侗(延平)に道学を学び、その後継者に指名されるほどになった。淳熙六年(一一七九)、南康軍知事となり、廬山の白鹿洞書院を復興させ、自ら教鞭を執って講学を行った。淳熙八年には浙東提挙となり、官僚に対する度重なる弾劾を行った。後年寧宗が即位したとき、宰相の趙汝愚の登用によって、章閣待制、兼侍講として中央に召された。しかし、政権を握った韓侂胄は、趙汝愚、朱熹をはじめ五十九人を偽党とし、理学を偽学として徹底的に弾圧した(慶元の党禍)。

そのため朱熹は出仕後わずか四十日あまりで罷免され、失意のうちに生涯を終えた。しかし、韓侂胄の死後、文公と諡され、淳祐元年(一二四一)、孔子廟に従祀されるに至った。生涯の多くを著述と講学にくし、周敦頤、二程子ら宋の理学を集大成した。著に『周易本義』十二卷、『詩集伝』二十卷、『四書集注』十九卷、『儀礼経伝通解』三十七卷、『資治通鑑綱目』五十卷、『楚辞集注』八卷、『朱文公文集』百卷、門人との座談をまとめた『朱子語類』一四〇巻など多数ある。伝は『宋史』巻四百二十九「道学三」に立てられている。

その詩説は、まず詩序を捨て去り、それまで行われてきた牽強附会な道義的解釈を斥け、人々の人情のあるがままに基づき、『詩』本来の心を探求しようとした。以下、近年刊行された朱熹の詩経学についての研究を挙げておく。

黄忠慎氏『朱子《詩経》学新探』(五南圖書出版公司、二〇〇二年)

檀作文氏『朱熹詩経学研究』(学苑出版社、二〇〇三年)

鄒其昌氏『朱熹詩経詮釈学美学研究』(北京商務印書館、二〇〇四年)

王倩氏『朱熹詩教思想研究』(北京大学出版社、二〇〇九年)  
陳鴻儒氏『朱熹《詩》韻研究』(社会科学文献出版社、二〇〇

一二年)

(三) 宋志作二十卷 『宋史』卷二百二、芸文志「詩類」に、「朱熹詩集傳二十卷、詩序辨一卷」とある。これに先行する資料としては、南宋、趙希弁『郡齋讀書志』卷五上、附志「經類」に、「詩集傳二十卷、詩序辨說一卷」と著録し、南宋、陳振孫『直齋書錄解題』卷二「詩類」に、「詩集傳二十卷、詩序辨說一卷」と著録し、その解題に、「朱熹撰。以大小序自爲一編、而辨其是非。其序呂氏讀詩記、自謂、少年淺陋之說、久而知其有所未安、或不免有所更定。今江西所刻晚年本、得於南康胡泳伯量、校之建安本、更定者幾什一云。(朱熹の撰。大小序を以て自ら一編と爲し、而して其の是非を辨ぜり。其の呂氏讀詩記に序して、自ら謂ふ、少かりし年の淺陋の說にして、久しくして其の未だ安らかならざる所有るを知り、或いは更定する所有るを免れず、と。今江西に刻せる所の晚年本は、南康の胡泳伯量に得て、之を建安本に校すに、更定する者幾什に一なりと云ふ)」という。いずれも『宋志』の記載と一致する。

(四) 朱子注易、凡兩易藁……不知其說之同異 『宋志』「易類」には朱熹の著作として、「朱熹易傳十一卷、又本義十二卷、易學啓蒙三卷、古易音訓二卷」と著録する。この『易伝』が『提要』がいう「初著」である。また、『書錄解題』卷一「易類」

にも、「易傳十一卷、本義十二卷、易學啓蒙一卷〔案宋史藝文志啓蒙三卷。〕」とあり、その解題に、「初爲易傳、用王弼本。復以呂氏古易經爲本義。其大旨畧同、而加詳焉。(初め易伝を爲りしとき、王弼本を用ふ。復た呂氏の古易経を以て本義を爲る。其の主旨略ぼ同じく、而して詳を加ふ)」という。これによれば、朱熹ははじめ『易』の注解にあたつて、『伊川易伝』と同じく王弼注本を用いていたが、のちに呂祖謙の校訂になる『古文周易経伝』(十二卷)を用いて『周易本義』を著したということになる。しかしながら、この『易伝』はもとより、『周易本義』の成書年次には多くの問題を含んでいる。たとえば、清、王懋竑『朱子年譜』卷二には、『本義』の成書は『集伝』と同じく淳熙四年(一一七七)、四十八歳の時であるとするが、『朱子年譜考異』卷二には、「按年譜、詩傳成。據傳序、成於丁酉十月、易本義則不知所據也。李微之序言成於乙巳丙午之間、當以李序爲正。(年譜を按ずるに、詩伝成る。伝の序に拠れば、丁酉十月に成り、易本義は則ち拠る所を知らざるなり。李微の序に乙巳・丙午の間に成ると言ふは、当に李序を以て正と爲すべし)」とあり、これによれば乙巳(淳熙十二年)から丙午(淳熙十三年)の間とする。また、『本義』の底本に用いられた呂祖謙の『古周易』の成書が、朱熹の跋文に「淳熙九年夏六月庚

子朔旦」とあり、朱熹五十二歳の時であることから、やはり通説である淳熙四年の説には従い難い。こうした問題については、

戸田豊三郎氏「坊刻周易本義の考察と原本本義の成立年代」

『易経注釈史綱』風間書房、一九六八年所収、もと「坊刻周易本義の考察より原本本義の成立に及ぶ」『広島大学文学部紀要』第二十三巻一号、一九六四年

今井宇三郎氏『易経上』『易経解題』（「新釈漢文大系」明治書院、一九八七年）

に詳しく考証されている。

(五) 注詩亦兩易藁 のちに『提要』が述べる『集伝』の序にある「淳熙四年丁酉冬十月戊子」以前の詩説改訂の記述としては、淳熙二年、朱熹四十六歳の時に呂祖謙に宛てた書簡に、「熹所集解、當時亦甚詳備。後以意定、所餘才此耳。然爲舊説牽制、不滿意處極多。比欲修正、又苦別無稽援、此事終累人也。（熹集解する所、當時も亦た甚だ詳備なり。後に意を以て定め、餘す所は才かに此れのみ。然れども旧説の牽制を為すに、意に満たざる処極めて多し。比ごろ修正せんと欲するも、又た別に稽援無きに苦しみ、此の事終に人を累はさん）」（「答呂伯恭」四二、『朱文公文集』卷三十三）とある。また、後の淳熙七年、五十一歳の書簡には、「詩説所欲修改處、是何等類。因書告畧

及之。比亦得間刊定。大抵小序盡出後人臆度、若不脱此窠臼、終無緣得正當也。去年畧修舊説、訂正爲多。向恨未能盡去、得失相半、不成完書耳。（詩説の修改せんと欲する所の処は、是れ何らの類ぞ。書に因りて告げて略ぼ之に及べり。比ごろ亦た間を得て刊定せり。大抵小序は尽く後人の臆度より出づるものにして、若し此の窠臼を脱せずんば、終に正當を得るに縁無きなり。去年略ぼ旧説を修し、訂正するところ多しと爲す。向（尚）ほ未だ尽く去ること能はずして、得失相ひ半ばし、完書を成さざるを恨むのみ）」（「答呂伯恭」七、『文集』卷三十四）とあり、ここでは詩序に対する強い批判が見られる。

(六) 呂祖謙 南宋、高宗、紹興七年（一一三七）〜孝宗、淳熙八年（一一八二）。字は伯恭、東萊先生と称せらる。諡は成公。金華県婺州（現在の浙江省金華県）の人。父は呂大器、弟は呂祖儉。学者の家系に生まれ、隆興年間（一一一六〜一六四）に進士となり、同時に博学宏詞科に及第した。のちに太学博士、著作郎兼国史院編修官などを歴任した。文章に長じ、学風は古義を宗とし、当時の理学には沈潜せず、また十七史によく通じていた。そのため、朱熹、張栻らと並び東南三賢と称せられた。また、交友は広く、朱熹と学説が対立した陸九齡、陸九淵兄弟と議論を戦わせた、いわゆる「鵝湖の会」の仲介も行つた。著

作としては、『古周易』一卷、『東萊左氏博議』二十五卷、『呂東萊先生文集』四十卷、『宋文鑑』(編著)一五〇卷などがあり、朱熹との共編による『近思錄』十四卷は特によく知られている。

また、『詩』の注解に関しては、『呂氏家塾読詩記』三十二巻があり、呂祖謙が最も力を注いだものである。これらはいずれも、近年、浙江古籍出版社から刊行された『呂祖謙全集』全十六冊に収められ、容易に見ることができるようになった。伝は『宋史』巻四百三十四「儒林四」に立てられている。

(七) 讀詩記 『呂氏家塾読詩記』を指す。朱熹の序を附す。呂祖謙は、淳熙六年(一一七九)の秋、『読詩記』の定稿を目指して筆を執るが、大雅「公劉」の二章以下を残したまま四十五歳で亡くなる。これ以降の詩篇については、かつての草稿をそのまま充てたという『読詩記』巻二十六「公劉」一章注。これを弟の呂祖僉(字は子約)が兄の友人であった丘宗卿に出版を託し、宗卿は序を朱熹に依頼した。その朱熹の序が淳熙九年に書かれていることから、死後かなり早い時期に出版されたものと考えられる。

その注解は、まず訓詁を挙げ、その後に文義を述べており、『毛伝』『鄭箋』を尊び、とりわけ詩序を墨守しているものの、古今の四十四家の説を広く採用し、出典を明示し、きわめて慎

重な態度で詩意を断じている。

版本には南宋刊本がおよそ三種あり、諸説あつて定め難いが、一般には淳熙江西漕台本(朱熹の序、尤袤の跋を附す、『四部叢刊』続編「経部」、上海商務印書館景印)が知られている。また、本邦においても和刻本(元禄九年刊)が出版されている。

(八) 所稱朱氏曰者……其說全宗小序 「呂氏家塾読詩記序」において朱熹自ら、「此書所謂朱氏者、實熹少時淺陋之說、而伯恭父誤有取焉。其後歷時既久、自知其說有所未安。(此の書に所謂る朱氏といふ者は、実に熹の少かりし時の淺陋の說にして、伯恭父誤りて取ること有り。其の後時を歷ること既に久しく、自ら其の說の未だ安らかならざる所有るを知る)」と述べている。『読詩記』における朱熹の詩說の引用は非常に多く、本文ではおよそ七百条、注文ではおよそ三六〇条を数える。

(九) 鄭樵 北宋、徽宗、崇寧三年(一一〇四)〜南宋、高宗、紹興三十二年(一一六二)。字は漁仲、溪西逸民、夾漈先生と号す。莆田県の人。枢密院編修官となり、『通志』二百巻を著した。伝は『宋史』巻四百三十六「儒林六」に立てられている。著述は多数あるが、『通志』のほかに現存しているものは、『夾漈遺稿』三巻、『爾雅注』三巻、『六經奥論』六巻(偽書説あり)、『詩』の注釈である『詩辨妄』六巻(顧頤剛輯佚、辨偽叢刊所



収、樸社、一九三三年）を数えるのみである。詩経解釈史においては、特に詩序批判を展開したことで知られる。伝記およびその著述については、

顧頡剛「鄭樵伝」『国学季刊』一卷—一号、国立北京大学、一九三三年）

同「鄭樵著述稿」『国学季刊』一卷—二号、国立北京大学、一九三三年）

の研究があり、特に近年においては、

吳懷祺氏『鄭樵研究』（廈門大学国学研究院資助出版叢書、廈門大学出版部、二〇一〇年）

が最も詳しい。また経解に関しての専論には、

江口尚純氏「鄭樵の詩経学（一）——その学説と立場——」

『詩経研究』第十一号、一九八六年）

同氏「鄭樵の経書観——特にその詩経学・春秋学をめぐって」

『日本中国学会報』第四十四号、一九九二年）

がある。

（二〇）朱子……見於語録 『朱子語類』卷八十、詩一「綱領」に、「詩序實不足信。向見鄭漁仲有詩辨妄、力詆詩序、其間言語太甚、以爲皆是村野妄人所作。始亦疑之。後來子細看一兩篇、因質之史記國語、然後知詩序之果不足信。（詩序は実に信ずる

に足らず。向に鄭漁仲に詩辨妄有るを見、力めて詩序を詆り、其の間の言語太甚だしく、以て皆な是れ村野妄人の作りし所なりと爲す。始め亦た之を疑ふ。後來子細に一兩篇を看、因りて之を史記・國語に質し、然る後に詩序の果して信ずるに足らざるを知る）」と見える。後年の朱熹が詩序を廢するに当たり、鄭樵の説に拠ったことについては、すでに余嘉錫『四庫提要辨証』卷一、經部一「詩集伝八卷」（中華書局、一九八〇年）が指摘しているように、南宋、黃震『黃氏日鈔』卷四「讀毛詩」に、「雪山王公質、夾漈鄭公樵、始皆去序而言詩。與諸家之說不同。晦庵先生、因鄭公之說、盡去美刺、探求古始。其說頗驚俗、雖東萊不能無疑焉。（雪山の王公質、夾漈の鄭公樵、始めて皆な序を去りて詩を言ふ。諸家の説と同じからず。晦庵先生、鄭公の説に因り、尽く美刺を去り、古始を探求す。其の説頗る俗を驚かし、東萊と雖も疑ひ無き能はず）」と見えている。また、南宋、王應麟『困学紀聞』卷三「詩」にも、「朱子詩序辨説、多取鄭漁仲詩辨妄。（朱子の詩序辨説は、多く鄭漁仲の詩辨妄に取る）」とある。

（二一）朱升 元、成宗、大德三年（一二九九）→明、太祖、洪武三年（一三三〇）。字は允升、安徽休寧の人。学者からは楓林先生と称せられた。幼くして学につとめ、終始その姿勢は変

わらず、とりわけ經學に精通していたという。至正四年（一三四四）に郷薦に挙げられ、池州の学正となったが、のち官を退いて石門に隱居し、以後もしばしば戦乱を避け、ついに一日も學問を怠ることはなかったという。やがて太祖朱元璋の目にとまり、至正二十七年（一三六七）、侍講学士を授けられ、知制誥、同修国史に進み、老いを理由に朝謁を免ぜられた。黄武元年（一三六八）、翰林学士に進み、朱元璋の重臣として、明朝開国に大いに功があった。著に『朱楓林集』十卷がある。『明史』卷一百三十六に伝が立てられている。

『詩』に関する著作としては、『明史』卷九十六「芸文志」に「朱升詩旁注八卷」が著録されており、本伝にも「所作詩經旁注、辭約義精」と見えている。これについて、劉毓慶氏『歴代詩経著述考（先秦——元代）』（中華書局、二〇〇二年）には、「詩経旁訓八卷、朱升撰、未見。」とあり、「見經義考、注曰存。今按、朱升、字允升、休寧人、爲元末名儒。明太祖召爲翰林學士。與五經皆有旁注、別有楓林集等。一作詩旁注。明史有傳。上海圖書館有元刻本詩経旁注四卷、不知是否一書。（經義考に見ゆ、注に存すと曰ふ。今按ずるに、朱升、字は允升、休寧の人、元末の名儒爲り。明の太祖召して翰林学士と爲す。五經に与<sup>お</sup>いて皆な旁注有り、別に楓林集等有り。一に詩旁注に作る。明

史に伝有り。上海圖書館に元刻本詩経旁注四卷有り、是否の一書なるかを知らず」（三八七頁）と述べる。ここで『提要』がいう、朱熹が歐陽脩の説に拠つて詩序を廢したという論は、清、朱彝尊『経義考』卷一百八、詩十一「朱子毛詩集伝」に、「朱升曰、朱子之於詩也、本歐陽氏之旨而去序文、明吳才老之說而叶音韻、以周禮之六義、三經而三緯之、賦比興各得其所。可謂無憾也已。（朱升曰はく、朱子の詩に於けるや、歐陽氏の旨に本づきて序の文を去り、吳才老の説を明らかにして音韻を叶へ、周礼の六義を以て、之を三經と三緯とし、賦・比・興各おの其所を得たり。憾み無しと謂ふべきのみ）」と引かれており、恐らくはこのことを指しているよう。また、『楓林集』卷六「六經」にも同文が見えているが、『提要』は『経義考』に拠つた可能性が高いと考えられる。なお、朱升の詩説については、黄忠慎氏前掲書に「明儒朱升以「無憾」二字歸結」（一二八頁）の論説がある。

（一二）**歐陽修** 北宋、真宗、景德四年（一〇〇七）〜神宗、熙寧五年（一〇七二）。字は永叔、醉翁、六一居士と号し、文忠と諡される。吉州廬陵の人。唐宋八大家の一。多くの著作を遺し、それらは『歐陽文忠公集』一五三卷にまとめられている。伝は『宋史』卷三百十九に立てられている。『詩』の注釈書と

しては『詩本義』十六卷があり、歐陽脩はそこで『詩』の解釈が人々の人情に基づくべきであることを説いて旧注を批判した。そのため宋代新注の端を発したといわれる。歐陽脩の詩経学に関する専論としては、

坂田新氏「歐陽修『詩本義』について」『詩経研究』第一号、一九七四年

江口尚純氏「歐陽脩の詩経学」『詩経研究』第十二号、一九八七年

土屋裕史氏「歐陽脩の『詩本義』について——「人情」を中心に」『中央大学大学院研究年報』三十二号、二〇〇二年

種村和史氏「『詩本義』に見られる歐陽脩の比喻説——伝箋正義との比較という視座で」『芸文研究』八十七号、二〇〇四年

などが挙げられる。

(二三) 巻首自序……序末稱時方輯詩傳 前述のとおり、『集伝』序に、「余時方輯詩傳、因悉次是語、以冠其篇云。淳熙四年丁酉冬十月戊子、新安朱熹序。」(余時に方に詩伝を輯め、因りて悉く是の語を次いで、以て其の篇に冠すと云ふ。淳熙四年丁酉冬十月戊子、新安の朱熹序す)と見えている。時に朱熹四十八歳。『年譜』巻二によれば、この年夏六月には『論語集注』、

『孟子集注』、『論孟或問』が完成した。

(一四) 其注孟子、以柏舟爲仁人不遇 『孟子』尽心下に、「貉稽曰、稽大不理於口。孟子曰、無傷也。士憎茲多口。詩云、憂心悄悄、愠于羣小、孔子也。肆不殄厥愠、亦不隕厥問、文王也。(貉稽曰はく、稽大いに口に理<sup>たの</sup>まず、と。孟子曰はく、傷むこと無かれ。士は憎<sup>ます</sup>ます茲れ多口なり。詩に云ふ、憂心悄悄たり、群小に愠<sup>い</sup>らるとは、孔子なり。肆<sup>こ</sup>に厥<sup>そ</sup>の愠<sup>い</sup>りを殄<sup>た</sup>たず、亦た厥<sup>ぐん</sup>の問<sup>もん</sup>を隕<sup>おと</sup>さずとは、文王なり、と)」とある。その『集注』に、「詩、邶風柏舟、及大雅緜之篇也。悄悄、憂貌。愠、怒也。本言衛之仁人、見怒於羣小。孟子以爲孔子之事可以當之。(詩は、邶風の柏舟、及び大雅の緜の篇なり。悄悄は、憂ふる貌。愠は、怒るなり。本と衛の仁人、群小に怒られしを言ふ。孟子以て孔子の事以て之に当つべしと爲す)」とある。詩序には、「柏舟、言仁而不遇也。衛頃公之時、仁人不遇、小人在側。(柏舟は、仁にして不遇なるを言ふなり。衛の頃公の時、仁人不遇にして、小人側に在り)」とあり、『集注』の説と同義である。しかし『集伝』では、「婦人不得於其夫、故以柏舟自比。……列女傳以此爲婦人之詩。今考其辭氣、卑順柔弱、且居變風之首、而與下篇相類。豈亦莊姜之詩也歟。(婦人其の夫を得られず、故に柏舟を以て自ら比す。……列女伝は此れを以て婦人の詩と爲す。今其の辞

氣を考ふるに、卑順柔弱、且つ変風の首めに居き、下篇と相ひ類す。豈に亦た莊姜の詩ならんや」とあり、全く詩意を異にする。

(二五) 白鹿洞賦 「白鹿洞」は、唐の李渤が江西省廬山の五老峰の麓に隱棲し、書物に親しみ白鹿を飼つて楽しみとしたことに由来する。のち南唐の昇元年間(九三七〜九四三)に、廬山国学を建てて白鹿洞書院とした。南宋の時代には書院はすっかり荒廢していたが、朱熹が南康軍知事として赴任したとき、これを復興して自ら学を講じ、海内第一の書院と称されるほどになった。そこで呂祖謙は「白鹿洞書院記」を作り、朱熹は「白鹿洞賦」、「白鹿洞揭示」、「白鹿洞学榜」、「白鹿洞洞牒」を作つた。

(一六) 以子衿爲刺學校之廢 「子衿」は、鄭風の詩。その詩序に、「子衿、刺學校廢也。亂世則學校不修焉。(子衿は、学校の廢るるを刺るなり。世亂るれば則ち學校修まらず)」とある。また、『毛伝』に、「青衿、青領也。學子之所服。(青衿は、青領なり。學子の服する所なり)」と説くように、「青衿」の語を学生、学徒を意味するのはこれより始まる。「白鹿洞の賦」に、「盼黄卷以置郵、廣青衿之疑問。樂菁莪之長育、拔雋髦而登進。(黄卷を盼つに置郵を以てし、青衿の疑問を広め、菁莪の長育

を楽しみ、雋髦<sup>しゅんぼう</sup>を抜きて登進す)」「『文集』卷二」とあり、ここでは学校や塾での教育のことを述べており、その意図するところは詩序や『毛伝』と同じである。また、下句の「菁莪」も、小雅、南有嘉魚之什「菁菁者莪」を指しており、その序に、「菁菁者莪、樂育材也。君子能長育人材、則天下喜樂之矣。(菁菁者莪は、材を育するを楽しむなり。君子能く人材を長育すれば、則ち天下喜んで之を楽しむ)」とある。これも賦で述べられていることと同意である。これに対して『集伝』では、「子衿」を「此れも亦た淫奔の詩」とし、「菁菁者莪」を「此れも亦た賓客を燕飲する詩」としており、賦と全く詩意を異にする。

(一七) 周頌豐年篇、小序辨說極言其誤 「小序辨說」は、『詩序辨說』一卷をいう。朱熹の詩序に対する批判をまとめたもの。したがって成書は『集伝』より後と考えられる。『宋志』に著録してあるように、もとは『集伝』に一卷として附していたが、現在では「四庫全書本」のごとく詩序に附して二巻として独立している。ここは『辨說』卷下、周頌「豐年」に、「豐年、秋冬報也。〔序誤。〕(豐年は、秋冬報ずるなり〔序誤る。〕)」と見えている。これに対して『集伝』では、「此秋冬報賽田事之樂歌。蓋祀田祖先農方社之屬也。言其收入之多、至於可以供祭祀、備百禮、而神降之福、將甚徧也。(此れ秋冬 田事を報賽する樂

歌なり。蓋し田祖・先農・方社の属を祀るなり。言ふところは其の収入の多きこと、以て祭祀に供し、百礼を備ふべきに至りて、神之に福を降す、將に甚だ徧からんとするなり」といい、詩序を敷衍して説いている。

(一八) 楊慎 明、孝宗、弘治元年(一四八八)〜世宗、嘉靖三十八年(一五五九)。明代の学者。字は用修、号は升庵、別に博南山人、博南戍史と号す。諡は文憲。貫籍は江西の廬陵。四川新都の人。幼くして詩に長じ、李東陽に認められて門人となつた。正徳二年(一五〇九)、四川の郷試に拔群の成績で及第し、同四年に礼部尚書に入り、同六年、進士に状元で及第し、翰林修撰を授けられた。以後、経筵展書官を歴任し、その間に『文献通考』を校訂し、『尚書』を進講し、『武宗実録』を編纂したが、講義の席で再三直諫したため、平民に落とされて雲州永昌衛に流刑となり、そのまま没した。著に、『周官音詁』一卷、『檀弓叢訓』二卷、『夏小正解』一卷、『春秋地名考』一卷、『軫注古音略』五卷、『経説』八卷、『演載記』一卷、『全蜀藝文志』六十四卷、『演程記』一卷、『希姓録』五卷、『丹鉛総録』二十七卷、『升庵外集』一百卷(以上『明志』に拠る)など多数ある。『明史』卷一百九十二に伝が立てられている。

(一九) 丹鉛録 『丹鉛総録』二十七卷をいう。もと『丹鉛続録』

十二卷、『丹鉛餘録』十七卷、『丹鉛新録』七卷、『丹鉛閏録』九卷(以上『明志』に拠る)があり、楊慎はこれらをまとめて『丹鉛摘録』十三卷を著した。さらに、門人の梁佐が諸録を合わせて一編とし、その中から重複しているものを刪り、天文、地理から身体、詩話、瑣語にいたるまで二十六類に分け、これを『丹鉛総録』とした。明嘉靖三十三年(一五五四)序刊。『提要』卷一一九、子部「雜家類三」に著録する。

ここでの説は、『総録』卷十八、詩話類「詩小序」に次のごとく見えている。

朱子作詩傳、盡去小序、蓋矯呂東萊之弊、一時氣信之偏、非公心也。馬端臨及姚牧菴諸家辯之悉矣。有一條可發一笑、併記於此。小序云、菁莪、樂育人才也。子衿、學校廢也。傳皆以爲非。及作白鹿洞賦、有曰、廣青衿之疑問。又曰、樂菁莪之長育。或舉以爲問、先生曰、舊説亦不可廢。此何異俗諺所謂玉波去四點、依舊是王皮乎。

(朱子 詩伝を作りて、尽く小序を去るは、蓋し呂東萊の弊を矯めんとし、一時氣信の偏にして、公の心に非ざるなり。馬端臨及び姚牧菴の諸家之を辯ずること悉せり。一條の一笑を發すべき有り、此に併記す。小序に云ふ、菁莪は、人才を育するを樂しむなり。子衿は、学校の廢るるなり、と。伝皆な

以て非と為す。白鹿洞の賦を作るに及び、曰へる有り、青衿の疑問を広む、と。又た曰はく、菁莪の長育を楽しむ、と。或ひと挙げて以て問ひを為す、先生曰はく、旧説は亦た廢すべからず、と。此れ何ぞ俗諺の所謂る玉波四点を去れば、旧に依りて是れ王皮なりとに異ならんや)

(二〇) 雖意度之詞、或亦不無所因歟 これについて、『辨証』は「是朱子所以廢詩序之故、提要非不知也。知之而仍信丹鉛錄之臆說者、因紀文達諸人不喜宋儒、讀楊慎之書、見其與己之意見相合、深喜其道之不孤。故遂助之張目、而不暇平情以核其是非也。(是の朱子の以て詩序を廢する所の故は、提要知らざるに非ざるなり。之を知りて仍ほ丹鉛錄の臆說を信ずるは、紀文達諸人宋儒を喜ばず、楊慎の書を読み、其の己が意見と相ひ合ふを見、深く其の道の孤ならざるを喜ぶに因る。故に遂に之を助けて目を張らしむも、平情以て其の是非を核するに暇あらざるなり)」という。

(二一) 說詩者……終不能以偏廢 『提要』卷十五、詩類の卷首に、「詩有四家、毛氏獨傳。唐以前無異論、宋以後則衆說爭矣。然攻漢學者、意不盡在於經義、務勝漢儒而已。仲漢學者、意亦不盡在於經義、憤宋儒之詆漢儒而已。各挾一不相下之心、而又濟以不平之氣。激而過當、亦其勢然歟。(詩に四家有、毛氏

のみ独り伝はる。唐以前には異論無く、宋以後には則ち衆說爭へり。然れども漢學を攻むる者は、意尽くは經義に在らず、漢儒に勝らんことを務むるのみ。漢學を伸ぶる者も、意は亦た尽くは經義に在らず、宋儒の漢儒を詆るを憤るのみ。各おのの相ひ下らざるの心を挟み、而して又た濟ふに不平の氣を以てす。激して當に過ぐるも、亦た其の勢ひ然るか」とある。こうした詩序をめぐる論争については、皮錫瑞『經學歴史』「九經學積衰時代」などを参照されたい。

【二】欽定詩經彙纂、雖以集傳居先、而序說則亦皆附錄、允爲持千古之平矣。舊本附詩序辨說於後、近時刊本皆刪去。鄭元稱毛公以序分冠諸篇、則毛公以前、序本自爲一卷。隋志唐志亦與毛詩各見。今已與辨說別著於錄、茲不重載。

#### 〔校勘〕

- ① 書前提要には、「則」字が無い。
- ② 殿版には、「允」字が無い。
- ③ 書前提要は、「辯」に作る。
- ④ 書前提要は、「辯」に作る。

⑤書前提要は、「予」に作る。

〔訓読〕

欽定詩經彙纂は、集伝を以て先に居くと雖も、序説は則ち亦た皆な附録するは、允に千古の平を持すと為す。旧本は詩序辨説を後に附するも、近時の刊本は皆な刪去す。鄭元毛公は序を以て分かちて諸篇に冠すと称すれば、則ち毛公以前、序は本と自ら一卷為り。隋志・唐志も亦た毛詩と各おの見ゆ。今已に辨説と別に録に著し、茲に重ねては載せず。

〔現代語訳〕

『欽定詩經伝説彙纂』は、『詩集伝』をまずはじめに掲げてはいるものの、詩序の説も同じくすべて附録していることは、まことに千古に及ぶ公平さを保持しているといえる。旧本『詩集伝』では、巻末に『詩序辨説』を附していたが、近時の刊本ではすべてけずり取つてしまつてゐる。鄭玄は毛公が序を分け、それぞれの詩篇のはじめに置いたといつてゐるが、それならば毛公以前は、序がもとは一卷としてまとまつていたことになる。『隋書』経籍志や『新唐書』芸文志にもやはり『毛詩』とは別に見えている。今、すでに『詩序辨説』とは別に著録したので、ここではあらた

めて記載しない。

〔注〕

(一) 欽定詩經彙纂 『欽定詩經伝説彙纂』をいう。二十一巻、巻首上下二巻、詩序上下二巻、計二十五巻から成る。雍正帝序。康熙帝の勅命によつて、王鴻緒（一六四五～一七二三）らが中心となつて編纂し、雍正五年（一七二七）に完成した。鴻緒は、初名を度心といい、字は季友、儼齋、横雲山人などと号した。江蘇華亭の人。王頊齡の弟。光緒十二年の進士。同二十二年、内閣学史兼戸部侍郎となり、工部尚書、戸部尚書を歴任した。また『明史』編集の総裁官を務めた。伝は『清史稿』巻二百七十一に立てられてゐる。

本書は、明、胡広の『詩經大全』に倣い、朱熹の『集伝』を中心に据えるが、新注、古注の争いを考慮し、それを補足する形で後に古義を多く附している。また、詩序についても別巻の形で採録されており、きわめて公平な態度を保つてゐるといえる。版本としては、四庫全書本の他に、『御纂七經』（浙江書局、同治六～九年刊、『詩』は七年刊）があり、本邦においても『欽定四經』（大島桃年等校、加賀国学蔵版、嘉永四年刊）として出版されている。『提要』巻十六、經部「詩類二」に著録する。

(二) 鄭元 鄭玄。後漢、順帝、永建二年(一二七)く獻帝、建安五年(二〇〇)。字は康成。青州北海郡高密の人。八世の祖鄭崇は哀帝の時の尚書僕射。全国を遊学し、第五元や馬融に師事した。「党錮の禁」以後は門戸を閉ざして学問に没頭したが、晩年には不本意ながらも朝廷に徴されて大司農となった。伝は『後漢書』卷三十五に立てられている。その学は古文に比重を置きながらも、今文、古文の諸説を統合して一家の説を形成するものであり、広く六經全般を研究した。多くの著作を残したが、現存するのは『礼記』、『周礼』、『儀礼』の三礼注と『毛詩鄭箋』二十卷のみである。なお、本文が「元」に作るのは、康熙帝の名である「玄・曄」を避諱したことによる。

ここで鄭玄がいう、毛公が本来一編の書であつた詩序を分け、それぞれの詩篇の冒頭に置いたという説は、小雅に見える佚詩「南陔」、「白華」、「華黍」の詩序の『鄭箋』に次のごとく見えている。

此三篇者、郷飲酒燕禮用焉。曰、笙入立于縣中、奏南陔白華華黍、是也。孔子論詩、雅頌各得其所。時俱在耳。篇第當在於此。遭戰國及秦之世而亡之。其義則與衆篇之義合編故存。至毛公爲詁訓傳、乃分衆篇之義、各置於其篇端云。又闕其亡者、以見在爲數。故推改什首、遂通耳。而下非孔子之舊。

(此の三篇は、郷飲酒・燕礼に用ふ。曰はく、笙入りて県中に立ち、南陔・白華・華黍を奏すとは、是れなり。孔子詩を論じ、雅頌各おの其の所を得たり。時に俱に在るのみ。篇第当に此に在るべし。戦国及び秦の世に遭ひて之を亡す。其の義は則ち衆篇の義と合編するが故に存す。毛公詁訓伝を爲るに至りて、乃ち衆篇の義を分け、各おの其の篇端に置くと云ふ。又た其の亡する者を欠き、見在するものを以て数と爲す。故に什首を推改して、遂に通ずるのみ。而して下は孔子の旧に非ず)

また、このことは『提要』(詩類一)の「詩序」においても採り上げられている。

(三) 毛公 ここでは毛亨(大毛公)か毛萇(小毛公)であるかは明示されていない。毛公が『毛詩』を伝えたというのは、『漢書』芸文志の記述より始まり、ようやく『後漢書』儒林伝下において毛萇(萇)の名が見える。以後これを踏襲し、『隋志』では『詩』に注釈を施したのが毛萇であると明記されている。しかし、鄭玄の『詩譜』(『毛詩正義』周南、関雎「毛詩國風」の条の疏)に、「魯人の大毛公が『詁訓』を作り、その家に伝えた。河間獻王がこれを得て、天子に献上し、それによつて小毛公を博士とした」とあり、三国呉、陸璣の『毛詩草木鳥獸虫



魚疏』(巻下「毛詩」)ではさらに「……荀卿は魯国の毛亨に『詩』を授けた。毛亨は『訓詁伝』を作り、趙国の毛萇に授けた。當時の人々は、毛亨を大毛公とし、毛萇を小毛公とした」という。この説をうけて『提要』では『隋志』の説を斥け、毛亨を『伝』の作者としている。詳しくは、『提要』(詩類一)の「毛詩正義」を参照。

(四) 隋志唐志與毛詩各見 ここは、『提要』の「詩序」の末尾に、「隋志有顧歡毛詩集解叙義一卷、雷次宗毛詩序義二卷、劉炫毛詩集小序一卷、劉瓛毛詩序義疏一卷。唐志則作卜商詩序二卷。今以朱子所辨其文較繁、仍析爲二卷。若其得失、則諸家之論詳矣。各具本書、茲不復贅焉。(隋志に顧歡の毛詩集解叙義一卷、雷次宗の毛詩序義二卷、劉炫の毛詩集小序一卷、劉瓛の毛詩序義疏一卷有り。唐志には則ち卜商の詩序二卷に作る。今朱子の辨ずる所は其の文較や繁なるを以て、仍りて析かちて二卷と爲す。其の得失の若きは、則ち諸家の論詳らかなり。各おの本書に具ふれば、茲には復た贅せず)」とあるのに基づく。『隋志』にはいずれも著録してある。「唐志」とあるのは『新唐書』芸文志のこと。『旧唐書』経籍志には詩序は著録されていない。

【二】其間經文譌異、馮嗣京所校正者、如鄘風終然允臧、然誤焉、王風牛羊下括、括誤括、齊風不能辰夜、辰誤晨、小雅求爾新特、爾誤我、胡然厲矣、然誤爲、朔月辛卯、月誤日、家伯維宰、維誤冢、如彼泉流、泉流誤流泉、爰其適歸、爰誤奚、大雅天降滔德、滔誤滔、如彼泉流、亦誤流泉、商頌降予卿士、予誤于。凡十二條。

#### 〔校勘〕

- ① 書前提要是、「焉」に作る。
- ② 殿版は、「悞」に作る。
- ③ 書前提要ならびに殿版は、「朔月辛卯月誤日」が「胡然厲矣然誤爲」の前にある。
- ④ 殿版は、「悞」に作る。
- ⑤ 殿版は、「悞」に作る。
- ⑥ 書前提要是、「冢」に作り、殿版は、「冢」に作る。
- ⑦ 書前提要ならびに殿版は、「冢」に作る。
- ⑧ 殿版は、「悞」に作る。
- ⑨ 殿版は、「悞」に作る。
- ⑩ 書前提要是、「昊天」に作る。
- ⑪ 殿版は、「悞」に作る。
- ⑫ 書前提要ならびに殿版は、「悞」に作る。

## 〔訓読〕

其の間の経文の訛異<sup>かい</sup>は、馮嗣京の校正する所の者は、酈風の終然允臧は、然を焉に誤り、王風の牛羊下括は、括を栝に誤り、斉風の不能辰夜は、辰を晨に誤り、小雅の求爾新特は、爾を我に誤り、胡然厲矣は、然を為に誤り、朔月辛卯は、月を日に誤り、家伯維宰は、維を冢に誤り、如彼泉流は、泉流を流泉に誤り、爰其適歸は、爰を奚に誤り、大雅の天降滔徳は、滔を恇に誤り、如彼泉流も、亦た流泉に誤り、商頌の降予卿士は、予を于に誤るが如し。凡て十二條なり。

## 〔現代語訳〕

『詩集伝』の経文の誤謬について、馮嗣京の校正は以下の通りである。酈風の「終然允臧」は、「然」を「焉」に誤り、王風の「牛羊下括」は、「括」を「栝」に誤り、斉風の「不能辰夜」は、「辰」を「晨」に誤り、小雅の「求爾新特」は、「爾」を「我」に誤り、「胡然厲矣」は、「然」を「為」に誤り、「朔月辛卯」は、「月」を「日」に誤り、「家伯維宰」は、「維」を「冢」に誤り、「如彼泉流」は、「泉流」を「流泉」に誤り、「爰其適歸」は、「爰」を「奚」に誤り、大雅の「天降滔徳」は、「滔」を「恇」に誤り、

「如彼泉流」も同じく「流泉」に誤り、商頌の「降予卿士」は、「予」を「于」に誤る。以上、合わせて十二条である。

## 〔注〕

(一) 馮嗣京 生卒年未詳。『河南通志』巻九に、順治十五年に新鄭県知県としてその名が見えており、『新鄭県志』五巻（順治十六年序刊、『稀見中国地方志匯刊』第三十四冊、中国書店、一九九二年、に収む）の編者としても名が見えるが、経歴などは未詳。

これについて、崔富章氏『四庫提要補正』（杭州大学出版社、一九九〇年）は、「提要中馮嗣京所校正者、當爲馮復京。字嗣宗。常熟人。江南通志藝文志有傳、嘗輯六家詩名物疏。提要所云校正經文譌異十二條者、即出是書也。（提要中に馮嗣京の校正する所の者は、當に馮復京と為すべし。字は嗣宗、常熟の人なり。江南通志芸文志に伝有り、嘗て六家詩名物疏を輯む。提要に云ふ所の経文の訛異を校正せる十二條は、即ち是の書より出づるなり）」といい、馮復京が正しいと指摘する。確かに、その『六家詩名物疏』巻二十二、斉風「東方未明篇」の「辰」に、

按不能辰夜之辰、今朱傳誤作晨。朱子釋詩時、齊魯韓三詩俱亡。雖有附見他籍者、皆不依用、則所从惟毛傳耳而。字畫多

譌、或傳寫之謬也。他如終然允臧之然作焉、羊牛下括作牛羊、求爾新特之爾作我、胡然厲矣之然作爲、家伯維宰之維作冢、小旻抑二如彼泉流作流泉、朔月辛卯之月作日、爰其適歸之爰作奚、天降滔德之滔作恹、降予卿士之予作于。俱是顛倒錯誤。今人不讀注疏、譌以傳譌。俱不能辨。

(按ずるに不能辰夜の辰は、今朱伝誤りて晨に作る。朱子詩を釈せる時、齊・魯・韓の三詩俱に亡ぶ。他籍を附見する者有りとも雖も、皆な依りて用ゐざれば、則ち从ふ所は惟だ毛伝のみ。字画訛り多く、或いは伝写の謬りなり。他には終然允臧の然を焉に作り、羊牛下括を牛羊に作り、求爾新特の爾を我に作り、胡然厲矣の然を為に作り、家伯維宰の維を冢に作り、小旻・抑の二つの如彼泉流を流泉に作り、朔月辛卯の月を日に作り、爰其適歸の爰を奚に作り、天降滔德の滔を恹に作り、降予卿士の予を于に作るが如し。俱に是れ顛倒錯誤なり。今人注疏を読まずして、訛るに伝の訛りを以てす。

俱に辨ずること能はず)

とあり、その内容は『提要』の引用とほぼ一致する。また、以下に引く陳啓源の「集伝疑誤」にも、「馮嗣宗」の名が見えてることから、やはり『提要』の誤りである。

また、『六家詩名物疏』の『提要』(巻十五、經部「詩類二」)

が、「明馮應京撰。應京、字可大、號慕岡。盱眙人。萬歷壬辰進士。官至湖廣按察使僉事。事迹具明史本傳。(明馮應京の撰。応京、字は可大、慕岡と号す。盱眙の人なり。万歴壬辰の進士。官は湖広按察使僉事に至る。事迹は明史本伝に具ぶ)」とするのも誤り。但し、「書前提要」では「詩名物疏五十五卷、明馮復京撰、復京字嗣宗、常熟人。……」と正しく示されている。

以下『提要』が引く諸家の校正箇所について、注では文淵閣四庫全書本『詩經集伝』を引用して確認を行った。本来であれば明版を用いるべきであるが、残念ながら筆者未見であるため、恐らくは明版を底本にして翻刻したであろう和刻本(寛文四年刊『頭書詩経集註』、以下、集註本と略す)を代わりに用い、併せて宋版を参照して対校を行った。なお、胡玉縉『四庫全書総目提要補正』(上海書店、一九九八年)および崔氏前掲書には、さらに多くの文字の校正が厳密に行われている。併せて参照されたい。

(二) 鄘風終然允臧、然誤焉 鄘風「定之方中」の二章に、「卜云其吉、終焉允臧。(卜に云ふ其れ吉なりと、終に焉に允に臧し)」とある。集註本も「終焉允臧」に作り、宋版は「終然允臧」に作る。

(三) 王風牛羊下括、括誤括 王風「君子于役」の二章に、「日

之夕矣、羊牛下括。<sup>（日の夕、羊牛下り括る）</sup>とある。集註本、宋版も「羊牛下括」に作る。ここは『名物疏』の校正と合わない。また、『提要』は「牛羊」と誤倒する。

（四）齊風不能辰夜、辰誤晨 齊風「東方未明」の三章に、「不能辰夜、不夙則莫。<sup>（辰夜すること能はず、夙からざれば則ち莫し）</sup>」とある。集註本は「不能晨夜」に作り、宋版は「不能辰夜」に作る。

（五）小雅求爾新特、爾誤我 小雅、祈父之什「我行其野」の三章に、「不思舊姻、求爾新特。<sup>（旧姻を思はず、爾が新特を求む）</sup>」とある。集註本は「求我新特」に作り、宋版は「求爾新特」に作る。

（六）胡然厲矣、然誤爲 小雅、祈父之什「正月」の八章に、「今茲之正、胡然厲矣。<sup>（今茲の正、胡ぞ然く厲しき）</sup>」とある。集註本、宋版も「胡然厲矣」に作る。

（七）朔月辛卯、月誤日 小雅、祈父之什「十月之交」の一章に、「十月之交、朔日辛卯。<sup>（十月の交、朔日辛卯）</sup>」とある。集註本も「朔日辛卯」に作り、宋版は「朔月辛卯」に作る。

（八）家伯維宰、家誤冢 小雅、祈父之什「十月之交」の四章に、「家伯冢宰、仲允膳夫。<sup>（家伯は冢宰、仲允は膳夫）</sup>」とある。集註本も「家伯冢宰」に作り、宋版は「家伯爲宰」に作る。

（九）如彼泉流、泉流誤流泉 小雅、小旻之什「小旻」の五章に、「如彼泉流、無淪胥以敗。<sup>（彼の泉流の如く、淪胥して以て敗るる無かれ）</sup>」とある。集註本、宋版も「如彼泉流」に作る。

（一〇）爰其適歸、爰誤奚 小雅、小旻之什「四月」の二章に、「亂離瘼矣、奚其適歸。<sup>（乱離して瘼めり、奚くにか其れ適歸せん）</sup>」とある。集註本は「奚其適歸」に作り、宋版は「爰其適歸」に作る。

（一一）大雅天降滔德、滔誤悒 大雅、蕩之什「蕩」の二章に、「天降滔德、女興是力。<sup>（天滔德を降す、女興こして是れ力む）</sup>」とある。集註本、宋版も「天降悒德」に作る。但し、宋版は補抄箇所当たる。

（一二）如彼泉流、亦誤流泉 大雅、蕩之什「抑」の四章に、「如彼泉流、無淪胥以亡。<sup>（彼の泉流の如く、淪胥して以て敗るる無かれ）</sup>」とある。集註本は「如彼流泉」に作り、宋版は「如彼泉流」に作る。

（一三）商頌降予卿士、予誤于 商頌「長發」の七章に、「允也天子、降于卿士。<sup>（允なるかな天子、卿士に降せり）</sup>」とある。集註本、宋版も「降于卿士」に作る。

【四】陳啓源所校正者、召南無使虺也吠、虺誤厖、何彼禮矣、禮誤穠、衛風遠兄弟父母、誤遠父母兄弟、小雅言歸斯復、斯誤思、昊天大慄、大誤泰、楚茨以享以祀、享誤饗、福祿膍之、膍誤嬾、畏不能趨、趨誤趨、不皇朝矣、皇誤遑、「下二章同。」大雅泂彼涇舟、泂誤淖、以篤于周祜、脱于字、周頌既右饗之、饗誤享、魯頌其旂萋萋、誤萋萋、商頌來格祁祁、誤祈祈。凡十四條。

〔校勘〕

- ① 殿版は、「悞」に作る。
- ② 書前提要ならびに殿版は、「悞」に作る。
- ③ 書前提要ならびに殿版は、「悞」に作る。
- ④ 書前提要ならびに殿版は、「悞」に作る。
- ⑤ 書前提要ならびに殿版は、「悞」に作る。
- ⑥ 書前提要ならびに殿版は、「悞」に作る。
- ⑦ 書前提要ならびに殿版は、「悞」に作る。
- ⑧ 書前提要は、「嬾」字を欠く。
- ⑨ 書前提要ならびに殿版は、「悞」に作る。
- ⑩ 書前提要ならびに殿版は、「悞」に作る。
- ⑪ 書前提要ならびに殿版は、「悞」に作る。
- ⑫ 書前提要ならびに殿版は、「悞」に作る。

⑬ 書前提要ならびに殿版は、「悞」に作る。

⑭ 殿版は「萋」に作る。

⑮ 書前提要ならびに殿版は、「悞」に作る。

〔訓読〕

陳啓源の校正する所の者は、召南の無使虺也吠は、虺を厖に誤り、何彼禮矣は、禮を穠に誤り、衛風の遠兄弟父母は、遠父母兄弟に誤り、小雅の言歸斯復は、斯を思に誤り、昊天大慄は、大を泰に誤り、楚茨の以享以祀は、享を饗に誤り、福祿膍之は、膍を嬾に誤り、畏不能趨は、趨を遑に誤り、不皇朝矣は、皇を遑に誤り、「下二章も同じ。」大雅の泂彼涇舟は、泂を淖に誤り、以篤于周祜は、于の字を脱し、周頌の既右饗之は、饗を享に誤り、魯頌の其旂萋萋は、萋萋に誤り、商頌の來格祁祁は、祈祈に誤る。凡て十四條なり。

〔現代語訳〕

陳啓源の校正は以下の通りである。召南の「無使虺也吠」は、「虺」を「厖」に誤り、「何彼禮矣」は、「禮」を「穠」に誤り、衛風の「遠兄弟父母」は、「遠父母兄弟」に誤り、小雅の「言歸斯復」は、「斯」を「思」に誤り、「昊天大慄」は、「大」を「泰」

に誤り、楚茨の「以享以祀」は、「享」を「饗」に誤り、「福祿膺之」は、「膺」を「媿」に誤り、「畏不能趨」は、「趨」を「趨」に誤り、「不皇朝矣」は、「皇」を「遑」に誤り、「以下二章も同じ。」大雅の「淠彼淠舟」は、「淠」を「淠」に誤り、「以篤于周祜」は、「于」の字を脱し、周頌の「既右饗之」は、「饗」を「享」に誤り、魯頌の「其旂茝茝」は、「茝茝」に誤り、商頌の「來格祁祁」は、「祈祈」に誤る。以上、合わせて十四条である。

## 〔注〕

(一) 陳啓源 明、清、光緒二十八年（一六八九）。字は長發、見桃と号す。一説に蘇州府吳江県の人。著に『毛詩稽古編』三十卷がある。また、他に『尚書辨略』二卷、『讀書偶筆』二卷、『存耕堂稿』四卷などがあつたとされるが、現在では伝わらない。また、伝記資料も非常に乏しい。その詩説は、詩序をきわめて尊び、実証的手法に基づいた解釈を行った。その方法は清朝考証学の先駆ともいえるものである。『稽古編』には、嘉慶十八年の刊本があり、『皇清経解』にも道光年間の刊本が収められている。『提要』『詩類二』に著録する。詳しくは、

沼尻徹誠氏『陳啓源の詩経学——『毛詩稽古編』研究』（北海道大学大学院文学研究科 研究叢書一八、北海道大学出版会、

二〇一〇年）を参照。

以下『提要』が引く陳啓源の説は、『稽古編』卷二十九「集伝疑誤」に見えている。これは、经文や伝注の誤謬、また反切の誤りなどを校正したものである。经文については、「集傳所載经文、近儒馮嗣宗以注疏本校之。得譌字及文倒者、共十有二。余續校之、又得十二譌字。脱者倒者、各一今列於左。（集伝に載する所の经文は、近儒馮嗣宗注疏本を以て之を校す。訛字及び文倒を得たること、共に十有二。余續けて之を校し、又た十二の訛字を得たり。脱する者倒する者、各一今左に列す）」といい、先の馮氏の挙げた十二条の校正をまず引用しつつ、合わせて二十六条を校正している。また、伝注については、「集傳經文多誤、而傳中譌字亦復不少。有朱子欲改而不及者、有後儒知。而辨者亦有相習而莫覺者。今列于左。（集伝の经文誤り多く、而して伝中の訛字も亦た復た少からず。朱子改めんと欲するも及ばざる者有るは、後儒の知る有り。而るに辨ずる者も亦た相ひ習ひて覚る莫き者有り。今左に列す）」といい、合わせて十二条を校正している。

(二) 召南無使虺也吠、虺誤虺 召南「野有死麕」の三章に、「舒而脱脱兮、無感我帨兮、無使虺也吠。（舒にして脱脱たれ、我

が帨うしろを感あはかす無かれ、尫こわ也をして吠へしむる無かれ」とある。

集註本、宋版も「無使尫也吠」に作る。『稽古編』卷二「野有死麕」に「説文云、尫、犬之多毛者、从犬多聲。今惟監本注疏、無使尫也吠、與説文合。呂記朱傳皆作廔非。（説文に云ふ、尫は、犬の毛多き者、犬に从ふ多の聲、と。今惟だ監本・注疏のみ、無使尫也吠にして、説文と合ふ。呂記・朱伝皆な廔に作るは非なり）」とあり、「疑誤」には、「召南無使尫也吠、尫誤作廔。（召南の無使尫也吠は、尫を誤りて廔に作る）」とある。

(三) 何彼穠矣、穠誤穠 召南「何彼穠矣」を指す。一章の「何彼穠矣、唐棣華。（何ぞ彼の穠さかんなる、唐棣の華）」、二章の「何彼穠矣、華如桃李。（何ぞ彼の穠さかんなる、華桃李の如し）」および詩題など、いずれも「穠」に作る。集註本も「穠」に作り、宋版は「穠」に作る。『稽古編』卷二「何彼穠矣」には、「穠左从衣。石經監本注疏及説文皆同。今集傳俗本、多誤従禾。（穠は、左は衣に从ふ。石經・監本・注疏及び説文も皆な同じ。今集伝の俗本は、多く誤りて禾に従ふ）」とあり、「疑誤」に、「何彼穠矣、穠誤作穠。（何彼穠矣は、穠を誤りて穠に作る）」とある。

(四) 衛風遠兄弟父母、誤父母兄弟 衛風「竹竿」の二章に、「女子有行、遠父母兄弟。（女子行有り、兄弟父母に遠ざかる）」と

ある。集註本も「遠父母兄弟」に作り、宋版は「遠兄弟父母」に作る。「疑誤」には、「衛竹竿遠兄弟父母、誤作遠父母兄弟。（衛の竹竿の遠兄弟父母は、誤りて遠父母兄弟に作る）」とある。

(五) 小雅言歸斯復、斯誤思 小雅、祈父之什「我行其野」の二章に、「爾不我畜、言歸思復。（爾我やを畜やしなはず、言ことに歸り思こに復らん）」とある。集註本、宋版も「言歸思復」に作る。「疑誤」には、「小雅言歸斯復、斯誤作思。（小雅の言歸斯復、斯を誤りて思に作る）」とある。

(六) 昊天大憯、大誤泰 小雅、小旻之什「巧言」の一章に、「昊天憯、予慎無辜。（昊天泰はなはだ憯おほいなり、予慎まことに辜つみ無し）」とある。集註本、宋版も「昊天泰憯」に作る。「疑誤」には、「昊天大憯、大誤作泰。（昊天大憯は、大を誤りて泰に作る）」とある。

(七) 楚茨以享以祀、亨誤饗 小雅、北山之什「楚茨」の一章に、「以爲酒食、以享以祀。（以て酒食を為つくり、以て享し以て祀る）」とある。集註本、宋版は「以饗以祀」に作る。但し、宋版は補抄箇所に当たる。「疑誤」には、「楚茨以享以祀、亨誤作饗。（楚茨の以享以祀は、亨を誤りて饗に作る）」とある。

(八) 福祿臝之、臝誤嬭 小雅、桑扈之什「采芣」の五章に、「樂

只君子、福祿<sup>あつ</sup>膍<sup>あつ</sup>之。(樂只の君子は、福祿之を膍くす)とある。集註本、宋版も「福祿膍之」に作る。但し、宋版は補抄箇所に当たる。「疑誤」には、「福祿膍之、膍誤作膍。〔監本注疏亦誤。〕」(福祿膍之は、膍を誤りて膍に作る〔監本・注疏も亦た誤る〕)とある。

(九) 畏不能趨、趨誤趨 小雅、都人士之什「緜蠻」の二章に、「豈敢憚行、畏不能趨。〔豈に敢へて行くを憚らんや、趨る能はざるを畏る〕」とある。集註本は「畏不能趨」に作り、宋版は「畏不能趨」に作る。「疑誤」には、「畏不能趨、趨誤作趨。〔畏不能趨は、趨を誤りて趨に作る〕」とある。

(一〇) 不皇朝矣、皇誤遑 小雅、都人士之什「漸漸之石」の一章に、「武人東征、不遑朝矣。(武人東征して、朝するに遑あらず)」とあり、以下全章「遑」に作る。集註本、宋版も「遑」に作る。但し、宋版は補抄箇所に当たる。「疑誤」には、「不皇朝矣、皇誤作遑。下二章同。(不皇朝矣は、皇を誤りて遑に作る。下二章も同じ)」とある。

(一一) 大雅溥彼涇舟、溥誤漚 大雅、文王之什「棫櫟」の三章に、「溥彼涇舟、烝徒楫之。(漚たる彼の涇舟は、烝徒之を楫さす)」とある。集註本も「漚彼涇舟」に作り、宋版は「溥彼涇舟」に作る。「疑誤」には、「大雅溥彼涇舟、溥誤作漚。〔監本

注疏亦誤。〕」(大雅の漚彼涇舟は、漚を誤りて溥に作る〔監本・注疏も亦た誤る〕)とある。

(一二) 以篤于周祜、脱于字 大雅、文王之什「皇矣」の五章に、「以篤周祜、以對于天下。(以て周の祜ひを篤くし、以て天下に對ふ)」とある。集註本、宋版は「以篤于周祜」に作る。「疑誤」には、「以篤于周祜、脱于字。(以篤于周祜は、于の字を脱す)」とある。

(一三) 周頌既右饗之、饗誤享 周頌、清廟之什「我将」に、「伊嘏文王、既右饗之。(伊れ嘏なるかな文王、既に右けて之を饗く)」とある。集註本、宋版は「既右享之」に作る。「疑誤」には、「周頌既右饗之、饗誤作享。(周頌の既右饗之は、饗を誤りて享に作る)」とある。

(一四) 魯頌其旂茝茝、誤茝茝 魯頌「泮水」の一章に、「其旂茝茝、鸞聲噦噦。(其の旂茝茝たり、鸞声噦噦たり)」とある。集註本は「其旂茝茝」に作り、宋版は「其旂茝茝」に作る。「疑誤」には、「魯頌其旂茝茝、誤作茝茝。(魯頌の其旂茝茝は、誤りて茝茝に作る)」とある。

(一五) 商頌來格祁祁、誤祈祈 商頌「玄鳥」に、「四海來假、來假祈祈。(四海來たり假る、來たり假ること祈祈たり)」とある。集註本は「來假祈祈」に作り、宋版は「來假祁祁」に作る。



「疑誤」には、「商頌來格祁祁、誤作祈祈。」「已上續校所得。」（商頌の來格祁祁は、誤りて祈祈に作る「已上校を續ぎて得る所なり」）とある。

【五】又傳文譌異、陳啓源所校正者、召南騶虞篇、貳牝豕也、牝誤牡、終南篇、黻之狀亞象兩弓相背、亞誤亞、弓誤已、南有嘉魚篇、鯉質鱗鱗、鱗誤鯉、又衍肌字、甫田篇、或耘或耔、引漢書苗生葉以上、脱生字、隤其上、誤墮其上、頌弁篇賦而比也、誤增興又二字、〔案此輔廣詩童子問所增。〕小宛篇、俗呼青雀、雀誤鶩、文王有聲篇、減成溝也、成譌城、召旻篇、池之竭矣章、比也誤作賦、閔予小子篇、引大招三公穆穆、誤三公揖讓、賚篇、此頌文王之功、王誤武、駉篇、此言魯侯牧馬之盛、魯侯誤僖公。凡十一條。

#### 〔校勘〕

- ①殿版は、「悞」に作る。
- ②殿版は、「悞」に作る。
- ③殿版は、「悞」に作る。
- ④殿版は、「悞」に作る。
- ⑤書前提要ならびに殿版は、「悞」に作る。

- ⑥書前提要ならびに殿版は、「悞」に作る。
- ⑦殿版は、「悞」に作る。
- ⑧書前提要ならびに殿版は、「悞」に作る。
- ⑨書前提要ならびに殿版は、「悞」に作る。
- ⑩書前提要ならびに殿版は、「悞」に作る。
- ⑪書前提要ならびに殿版は、「悞」に作る。

#### 〔訓読〕

又た伝文の訛異は、陳啓源の校正する所の者は、召南の騶虞篇、貳牝豕也は、牝を牡に誤り、終南篇、黻狀亞象兩弓相背は、亞を亞に誤り、弓を已に誤り、南有嘉魚篇、鯉質鱗鱗は、鱗を鯉に誤り、又た肌の字に衍し、甫田篇、或いは耘し或いは耔すは、漢書の苗生葉以上を引き、生の字を脱し、隤其上は、墮其上に誤り、頌弁篇、賦而比は、誤りて興又の二字を増し、〔案ずるに此れは輔廣の詩童子問の増す所なり。〕小宛篇、俗呼青雀は、雀を鶩に誤り、文王有聲篇、減成溝也は、成を城に訛り、召旻篇、池の竭くるなりの章は、比也を誤りて賦に作り、閔予小子篇、大招の三公穆穆を引き、三公揖讓に誤り、賚篇、此頌文王之功は、王を武に誤り、駉篇、此言魯侯牧馬之盛は、魯侯を僖公に誤る。凡て十一條なり。

## 〔現代語訳〕

さらに伝文の誤謬について、陳啓源の校正は以下の通りである。召南の騶虞篇の「犯牝豕也」は、「牝」を「牡」に誤り、終南篇の「黻之状亞象兩弓相背」は、「亞」を「亞」に誤り、「弓」を「已」に誤り、南有嘉魚篇の「鯉質鱗鱗」は、「鱗」を「鯽」に誤り、また「肌」の字を余分に増し、甫田篇の「或いは耘し或いは耔す」では、『漢書』の「苗生葉以上」を引用し、「生」の字を脱し、「隤其上」を「墮其上」に誤り、頍弁篇の「賦而比也」は、誤って「興又」の二字を増し、「おもうに、これは輔広の『詩童子問』が増補したものである。」小宛篇の「俗呼青雀」は、「雀」を「鶯」に誤り、文王有声篇の「減成溝也」は、「成」を「城」に誤り、召旻篇の「池の竭くるなり」の章では、「比也」を誤って「賦」とし、閔予小子篇では、『楚辭』の「大招の「三公穆穆」を引用して「三公揖讓」に誤り、賁篇の「此頌文王之功」では、「王」を「武」に誤り、駉篇の「此言魯侯牧馬之盛」では、「魯侯」を「僖公」に誤る。以上、合わせて十一条である。

## 〔注〕

(一) 召南騶虞篇、牝誤牡 召南「騶虞」の一章「彼茁者葭、壹

發五豝、于嗟乎騶虞。(彼の茁たる者は葭、壹發五豝、于嗟乎騶虞)の『集伝』に、「犯、牡豕也。(犯は、牡豕なり)」とあるのを指す。集註本、宋版も「牡」に作る。「疑誤」に、「壹發五豝注、犯牡豕也。牡字誤、當作牝。」「大全載潛室陳氏語辨之。」(壹發五豝の注に、犯は牡豕なり、と。牡の字誤り、当に牝に作るべし「大全に潛室陳氏の語を載せて之を辨ず」とある。

(二) 終南篇、黻之状亞……弓誤已 秦風「終南」の二章「君子至止、黻衣繡裳。(君子至る、黻衣繡裳す)」の『集伝』に、「黻之状、亞兩已相戾也。(黻の状、亞は兩已相ひ戾するなり)」とあるのを指す。集註本、宋版も「黻之状亞兩已相戾也」に作る。「疑誤」には、「黻衣繡裳注、黻之状、亞兩已相背。亞當作亞、已當作弓。(黻衣繡裳の注に、黻の状、亞は兩已相ひ背くなり、と。亞は当に亞に作るべし、已は当に弓に作るべし)」とある。

(三) 南有嘉魚篇、鯉質鱗鱗、鱗誤鯽、又衍肌字 小雅、白華之什「南有嘉魚」の一章「南有嘉魚、烝然罩罩(南に嘉魚有り、烝然として罩罩す)」の『集伝』に、「嘉魚、鯉質、鱗鱗肌、肉甚美、出於沔南之丙穴。(嘉魚は、鯉の質、鱗鱗の肌、肉甚だ美なり、沔南の丙穴より出づ)」とあるのを指す。集註本、宋版は「鱗鱗肌」に作る。「疑誤」には、「南有嘉魚注、鱗鱗肌。

鯽字誤、當作鱗。肌字衍。「朱克升疏義辨之、而大全不載。」（南有嘉魚の注に、鱒鯽の肌なり、と。鯽の字誤り、当に鱗に作るべし。肌の字衍なり「朱克升の疏義に之を辨ずるも、大全には載せず」とある。）

（四）甫田篇、或耘或耔……隳其土、誤隳其土 小雅、北山之什「甫田」一章「或耘或耔、黍稷薿薿。（或いは耘し或いは耔す、黍稷薿薿たり）」の『集伝』に、「耘、除草也。耔、離本也。蓋后稷爲田、一畝三畝、廣尺深尺、而播種於其中。苗葉以上、稍耨隳草、因隳其土以附苗根。隳盡畝平、則根深而能風與旱也。（耘は、除草なり。耔は、本を離ぐなり。蓋し后稷田を爲む、一畝三畝、広さ尺深さ尺、而して種を其の中に播す。苗葉以上、稍や隳草を耨り、因りて其の土を隳にして以て苗根に付く。隳盡き畝平かなれば、則ち根深くして風と旱に能ふるなり）」とあるのを指す。集註本、宋版も同じ。但し、宋版は補抄箇所に当たる。「疑誤」には、「或耘或耔注、引漢書苗生葉、脱生字。隳其上、誤作隳其土。（或いは耘し或いは耔すの注に、漢書の苗生葉を引き、生の字を脱す。隳其上は、誤りて隳其土に作る）」とある。ここである「漢書云々」は、『漢書』卷二十四上「食貨志上」に、「苗生葉以上、稍耨隳草、因隳其土以附根苗。故其詩曰、或芸或芋、黍稷薿薿。（苗葉を生ずる以上、稍や隳草

を耨り、因りて其の土を隳て以て根苗に附す。故に其の詩に曰はく、或いは芸り或いは芋ふ、黍稷薿薿たり、と）」とあるのをいう。

（五）頍弁篇、賦而比也、誤增興又二字 小雅、桑扈之什「頍弁」一章の『集伝』に、「賦而興、又比也。（賦にして興、又た比なり）」とあるのを指す。以下二章、三章も同じ。集註本、宋版も「賦而興又比也」に作る。但し、宋版は補抄箇所にあたる。「疑誤」に、「頍弁、賦而興、又比也。原本作賦而比。輔廣劉瑾増入興又字誤。三篇同。（頍弁に、賦にして興、又た比なり、と。原本は賦而比に作る。輔廣・劉瑾、興又の字を増入して誤る。三篇も同じ）」とある。

（六）輔廣 生卒年未詳。字は漢卿、潜庵と号す。秀州崇徳県の人。父の輔達は、宋金戦争の時に戦功があり、それによつて邵州防禦使、知泰州となつた。初め呂祖謙のもとで学び、のちに朱熹に師事し、その高弟として世に「慶源の輔氏」と知られるほどになつた。慶元年間（一一九五―一二〇〇）の初め、偽字の禁によつて多くの学生が解散したが、輔廣はひとり動ぜず、のち伝貽書院を築いて学を講じ、伝貽先生と称せられた。著に『詩童子問』十卷、『語孟学庸答問』、『四書纂疏』、『六经集解』、『通鑑集議』、『潜庵日新録』、『師訓編』がある。『宋元学案』

卷六十四「朝奉輔伝貽先生広」に伝が立てられている。詳しくは、田中謙二氏「朱門弟子師事年攷」(『田中謙二著作集』第三卷、汲古書院、二〇〇一年、に収む)の「輔広」の項(二七二頁)を参照。

(七) 詩童子問 本文八卷、首一卷、尾一卷、合わせて十卷から成るが、『経義考』は二十卷とする。恐らくはもともと二十卷であったが、のちの版本では十卷に改めたのであろう。

『集伝』に対して師説を承けて忠実に敷衍したものであり、平生より朱熹に『詩』の説を質問し、それをまとめたことから「童子問」と名付けられた。はじめに「詩伝綱領」として大序、小序を載せ、『尚書』、『周礼』、『論語』から『詩』を説いた語を採録し、それらに注釈を附し、あわせて諸儒の説を採り上げて『詩』を読む方法を明らかにしている。本文には経文は載せず、章ごとに分けて注を施し、卷末に「協音考異」を収録する。

版本には、通行の汲古閣本(十卷、崇禎年間刊)の他、元版(二十卷、首一卷、至正四年刊、『日本宮内庁書陵部蔵宋元版漢籍影印叢書』第一輯、北京綫装書局景印、二〇〇二年)が存する。また本邦においても、汲古閣本を刻した官版(文化十二年刊)が出版されている。

(八) 小宛篇、俗呼青觜、雀誤觜 小雅、小旻之什「小宛」の五

章「交交桑扈、率場啄粟。(交交たる桑扈、場に率つて粟を啄む)」の『集伝』に、「桑扈、竊脂也。俗呼青觜。肉食不食粟。(桑扈は、窃脂なり。俗に青觜と呼ぶ。肉食にして粟を食はず)」とあるのを指す。集註本、宋版も「觜」に作る。「疑誤」に、「小宛交交桑扈注、俗呼青觜。觜字誤、當作雀。(小宛の交交たる桑扈の注に、俗に青觜と呼ぶ、と。觜の字誤り、当に雀に作るべし)」とある。

(九) 文王有聲篇、滅成溝也、成譌城 大雅、「文王有聲」の三章「築城伊滅、作豐伊匹。(城を築く伊れ滅、豊を作る伊れ匹)」の『集伝』に、「滅、城溝也。方十里爲成、成間有溝。深廣各八尺。(滅は、城溝なり。方十里を成と爲し、成間に溝有り。深廣各おの八尺)」とあるのを指す。集註本も「城」に作り、宋版は「成」に作る。「疑誤」に、「築城伊滅注、滅、城溝也。城字誤、當作成。(城を築く伊れ滅の注に、滅は、城溝なり、と。城の字誤り、当に成に作るべし)」とある。

(一〇) 召旻篇、池之竭矣章、比也誤作賦 大雅、蕩之什「召旻」六章の『集伝』に、「賦也。(賦なり)」とある。集註本、宋版も「賦也」に作る。但し、宋版は補抄箇所に当たると。「疑誤」に、「池之竭矣章注、賦也。朱子自云作比爲是。〔見大全。〕(池の竭くるなりの章の注に、賦なり、と。朱子自ら比に作るを是

と為すと云ふ「大全に見ゆ」とある。

(一一) 関予小子篇、引大招三公穆穆、誤三公揖讓 周頌、関予小子之什「関予小子」の『集伝』に、「楚辭云、三公揖讓、登降堂。(楚辭に云ふ、三公揖讓して、堂に登り降る、と)」とあるのを指す。集註本、宋版も「三公揖讓」に作る。「疑誤」に、「関予小子、引大招三公揖讓。劉瑾言揖讓當作穆穆。(関予小子に、大招の三公揖讓すを引く。劉瑾 揖讓は当に穆穆に作るべしと言ふ)」とある。『楚辭』のこの句は大招第十(『楚辭集注』巻七)に見える。

(一二) 賁篇、此頌文武之功、王誤武 周頌、関予小子之什「賁」の『集伝』に、「此頌文武之功、而言其大封功臣之意也。(此れ文武の功を頌して、其の大いに功臣を封ずる意を言ふなり)」とあるのを指す。集註本、宋版も「文武」に作る。「疑誤」に、「賁注、此頌文武之功。文武當作文王。(賁の注に、此れ文武の功を頌す、と。文武は当に文王に作るべし)」とある。

(一三) 駉篇、此言僖公牧馬之盛、魯侯誤僖公 魯頌「駉」の一章の『集伝』に、「此詩言僖公牧馬之盛。由其立心之遠、故美之。(此の詩は僖公牧馬の盛んなるを言ふ。其の立心の遠きによる、故に之を美す)」とあるのを指す。集註本、宋版も「僖公」に作る。「疑誤」に、「駉注、此言僖公牧馬之盛。輔廣云、

僖公當作魯侯。「大全載其語。」(駉の注に、此れ僖公牧馬の盛んなるを言ふ、と。輔廣云ふ、僖公は当に魯侯に作るべし、と。『大全に其の語を載す』)とある。

【六】史榮所校正者、衛風伯兮篇傳曰女爲悅己者容、己下脱者字、<sup>①</sup>王風采芣篇、蕭荻也、<sup>②</sup>荻誤荻、唐風葛生篇、城營城也、<sup>③</sup>營誤塋、秦風蒹葭篇、小渚曰沚、<sup>④</sup>小誤水、小雅四牡篇、今鷄鳩也、<sup>⑤</sup>鷄誤鴉、蓼蕭篇、在衡曰鸞、<sup>⑥</sup>衡誤鑣、采芣篇、即今苦蕒菜、<sup>⑦</sup>蕒誤蕒、正月篇、申包胥曰、人定則勝天、<sup>⑧</sup>定誤衆、小弁篇、江東呼爲鴨鳥、<sup>⑨</sup>鴨誤鴨、巧言篇、君子不能聖讒、<sup>⑩</sup>聖誤堅。凡十條。

#### 〔校勘〕

- ①書前提要ならびに殿版は、「王風」に誤る。
- ②底本、書前提要、殿版、いずれも「巳」に作るが、粵刻本に従って改める。
- ③底本は「巳」に作り、書前提要ならびに殿版は、「巳」に作るが、粵刻本に従って改める。
- ④書前提要ならびに殿版は、「王風」の二字を欠く。
- ⑤書前提要ならびに殿版は、「悞」に作る。

- ⑥ 書前提要ならびに殿版は、「悞」に作る。
- ⑦ 殿版は、「悞」に作る。
- ⑧ 殿版は、「悞」に作る。
- ⑨ 殿版は、「悞」に作る。
- ⑩ 書前提要ならびに殿版は、「悞」に作る。
- ⑪ 書前提要ならびに殿版は、「悞」に作る。
- ⑫ 書前提要ならびに殿版は、「悞」に作る。
- ⑬ 殿版は、「悞」に作る。

## 〔訓読〕

史榮の校正する所の者は、衛風の伯兮篇、伝曰女為悦己者容は、己の下に者の字を脱し、王風の采芣篇、蕭荺也は、荺を荻に誤り、唐風の葛生篇、城宮域也は、宮を埜に誤り、秦風の蒹葭篇、小渚曰汜は、小を水に誤り、小雅の四牡篇、今鷄鳴也は、鷄を鵲に誤り、蓼蕭篇、在衡曰鸞は、衡を鑣に誤り、采芣篇、即今苦蕒菜は、蕒を蕒に誤り、正月篇、申包胥曰人定則勝天は、定を衆に誤り、小弁篇、江東呼為鴨鳥は、鴨を鴨に誤り、巧言篇、君子不能聖讒は、聖を埜に誤る。凡て十條なり。

## 〔現代語訳〕

史榮の校正については以下の通りである。衛風の伯兮篇の「伝曰女為悦己者容」は、「己」の下に「者」の字を脱し、王風の采芣篇の「蕭荺也」は、「荺」を「荻」に誤り、唐風の葛生篇の「城宮域也」は、「宮」を「埜」に誤り、秦風の蒹葭篇の「小渚曰汜」は、「小」を「水」に誤り、小雅の四牡篇の「今鷄鳴也」は、鵲を鵲に誤り、蓼蕭篇の「在衡曰鸞」は、「衡」を「鑣」に誤り、采芣篇の「即今苦蕒菜」は、「蕒」を「蕒」に誤り、正月篇の「申包胥曰、人定則勝天」は、「定」を「衆」に誤り、小弁篇の「江東呼為鴨鳥」は、「鴨」を「鴨」に誤り、巧言篇の「君子不能聖讒」は、「聖」を「埜」に誤る。以上、合わせて十条である。

## 〔注〕

(一) 史榮 生卒年未詳。号は雪汀老人、浙江鄞県の人。経歴は未詳。著に『風雅遺音』四卷がある。これは『詩』の音韻学の書であり、『集伝』の音釈の不備、後人が妄りに加えた箇所について詳しく考証している。全体は「集伝用旧訓義而無音」、「集伝有異義而不別為之音」、「音与伝義背」、「古今未有之音」、「声誤」、「韻誤」、「音誤」、「誤音為叶」、「誤叶為音」、「四声誤読」、「泛云四声之誤」、「邶風注与某同之誤」、「補音」、「叶音欠誤」、「叶音誌略」の十五篇、また附録として、「経文誤字」、「経文

疑義」、「京本音切考異釈文」、「叶韻紀原」、「吳棫韻補考異」、「集  
傳相沿之訛」、「俗書相沿之訛」、「集傳偶考」、「音訂誤」の九篇、  
あわせて二十四篇から成る。『提要』卷十八、經部、「詩類存目  
二」に著録する。また、のちに紀昀が校訂した『審定風雅遺音』  
二卷（乾隆二十五年刊、『叢書集成初編』畿輔叢書 所収）があ  
る。本稿では、乾隆十四年刊、一灣齋藏板『風雅遺音』二卷（『統  
修四庫全書』經部「詩類」所収）に拠った。以下の校正は、『遺  
音』卷下「集傳相沿之訛」に見える。

（二）衛風伯兮篇、傳曰女爲悅己者容、己下脱者字 衛風「伯兮」  
の二章「豈無膏沐、誰適爲容。（豈に膏沐無からんや、誰をか  
適として容を爲さん）」の『集傳』に、「傳曰、女爲説己容。（伝  
に曰はく、女は己を説ぶものの爲に容づくる、と）」とあるの  
を指す。集註本、宋版も「女爲説己容」に作る。『遺音』に、「伯  
兮篇、誰適爲容。集傳、傳曰、女爲悦己者容。按悦己下、恐誤  
脱者字。（伯兮篇に、誰をか適として容を爲さん、と。集傳に、  
伝に曰はく、女は己を悦ぶ者の爲に容づくる、と。按ずるに悦  
己の下、恐らくは誤りて者の字を脱せん）」とある。なお「伝  
に曰はく」とあるが、この句は『毛伝』には見えず、恐らくは、  
『史記』卷八十六「刺客列伝」（豫讓伝）に、「豫讓遁逃山中曰、  
嗟乎、士爲知己者死、女爲説己者容。今智伯知我、我必爲報讎

而死、以報智伯。則吾魂魄不愧矣。（豫讓山中に遁逃して曰は  
く、嗟乎、士は己を知る者の爲に死し、女は己を説ぶ者の爲に  
容づくる。今智伯我れを知る。我れ必ず爲に讎を報いて死し、  
以て智伯に報ぜん。則ち吾が魂魄愧ぢざらん、と）」とあるの  
に拠るものであろう。

（三）王風采葛篇、蕭蔹也、萩誤萩 王風「采葛」の二章「彼采  
蕭兮、一日不見、如三秋兮。（彼しこに蕭を采る、一日見ざれ  
ば、三秋の如し）」の『集傳』に、「蕭、萩也。白葉莖麤、科生  
有香氣。祭則炳以報氣、故采之。（蕭は、萩なり。白葉にして  
莖麤、科生にして香氣有り。祭には則ち炳きて以て氣を報ず、  
故に之を采る）」とあるのを指す。集註本は「萩」に作り、宋  
版は「萩」に作る。『遺音』に、「王風采葛篇、彼采蕭兮。集傳、  
蕭、萩也。白葉莖麤、科生有香氣。按萩非蕭類、亦安得香氣。  
此必萩字之譌。今爾雅釋草竝相沿爲萩。惟釋文是萩字可考。（王  
風の采葛篇に、彼しこに蕭を采る、と。集傳に、蕭は、萩なり。  
白葉にして莖麤、科生に香氣有り、と。按ずるに萩は蕭類に非  
ずして、亦た安くんぞ香氣有るを得んや。此れは必ず萩の字の  
訛りなり。今爾雅釋草は並びに相ひ沿ひて萩と爲す。惟だ釈  
文のみ是れ萩の字なるは考ふべし）」とある。

（四）唐風葛生篇、城營城也、營誤塋 唐風「葛生」の二章「葛

生蒙棘、薺蔓于域。(葛生じて棘に蒙ひ、薺域に蔓る)の『集伝』に、「域、塋域也。(域は、塋域なり)」とあるのを指す。集註本、宋版も「塋」に作る。『遺音』に、「唐風葛生篇、薺蔓于域。集傳、域、塋域也。按塋當爲營。(唐風の葛生篇に、薺域に蔓る、と。集伝に、域は、塋域なり、と。按ずるに塋は當に營と爲すべし)」とある。

(五) 秦風蒹葭篇、小渚曰沚、小誤水 秦風「蒹葭」三章「宛在水中沚(宛として水の中沚に在り)」の『集伝』に、「小渚曰沚。(小渚を沚と曰ふ)」とあるのを指す。しかし、『遺音』には、「秦風蒹葭篇、宛在水中坻。集傳、水渚曰坻。按坻本訓小渚。此水渚、必小渚字之誤。(秦風の蒹葭篇に、宛として水の中沚に在り、と。集伝に、小渚を坻と曰ふ、と。按ずるに坻の本訓は小渚なり。此れ水渚は、必ず小渚の字の誤りなり)」とあり、二章の『集伝』の「小渚曰坻。(小渚を坻と曰ふ)」を指している。したがって、『提要』が「小渚曰坻」の「坻」を「沚」に作るの誤り。なお、集註本、宋版も「小渚」に作る。

(六) 小雅四牡篇、今鷓鴣也、鷓誤鴣 小雅、鹿鳴之什「四牡」の三章「翩翩者騅、載飛載下、集于苞栩。(翩翩たる騅、載ち飛び載ち下り、苞栩に集まる)」の『集伝』に、「騅、夫不也。今鷓鴣也。凡鳥之短尾者、皆騅屬。(騅は、夫不なり。今の鷓

鴣なり。凡そ鳥の短尾なる者は、皆な騅の属なり)」とあるのを指す。集註本、宋版も「鷓」に作る。『遺音』に、「小雅四牡篇、翩翩者騅。集傳、夫不也。今鷓鴣也。按鷓音浮、今多譌作鷓。(小雅の四牡篇に、翩翩たる騅、と。集伝に、夫不なり。今の鷓鴣なり、と。按ずるに鷓は音浮、今多く訛りて鷓に作る)」とある。

(七) 蓼蕭篇、在衡曰鸞、衡誤鑣 小雅、白華之什「蓼蕭」の四章「和鸞離離、萬福攸同。(和鸞離離、萬福の同まる攸)」の『集伝』に、「和鸞、皆鈴也。在軾曰和、在鑣曰鸞。皆諸侯車馬之飾也。(和鸞は、皆な鈴なり。軾に在るを和と曰ひ、鑣に在るを鸞と曰ふ。皆な諸侯車馬の飾りなり)」とあるのを指す。集註本、宋版も「鑣」に作る。『遺音』に、「蓼蕭篇、和鸞離離。集傳、和鸞、皆鈴也。在軾曰和、在鑣曰鸞。皆諸侯車馬之飾也。按秦風駟驥篇、輶車鸞鑣。集傳云、驅逆之車、置鸞於馬銜之兩旁。乘車則鸞在衡、和在軾也。今此詩正指乘車、則鸞當在衡。恐鑣字是衡字之誤。(蓼蕭篇に、和鸞離離たり、と。集伝に、和鸞は、皆な鈴なり。軾に在るを和と曰ひ、鑣に在るを鸞と曰ふ。皆な諸侯の車馬の飾りなり、と。按ずるに秦風の駟驥篇に、輶車鸞鑣、と。集伝に云ふ、驅逆の車、鸞を馬銜の両旁に置く。乗車すれば則ち鸞は衡に在りて、和は軾に在るなり、と。



今此の詩正に乘車するを指す。則ち鸞は當に衡に在るべし。恐らくは鑣の字は是れ衡の字の誤りならん」とある。

(八) 采芭篇、即今苦蕒菜、蕒誤蕒 小雅、彤弓之什「采芭」の一章「薄言采芭（薄か言に芭を采る）」の『集伝』に、「芭、苦菜也。青白色、摘其葉有白汁出。肥可生食。亦可蒸爲茹。即今苦蕒菜。宜馬食。軍行采之。人馬皆可食也。（芭は、苦菜なり。青白色にして、其の葉を摘めば白汁有りて出づ。肥えて生食すべし。亦た蒸して茹と爲すべし。即ち今の苦蕒菜なり。馬食に宜し。軍行に之を采る。人馬皆な食ふべければなり）」とあるのを指す。集註本は「蕒」に作り、宋版は「蕒」に作る。『遺音』に、「采芭篇、薄言采芭。集傳、即今苦蕒菜。按蕒音買、今多譌作蕒。（采芭篇に、薄か言に芭を采る、と。集伝に、即ち今の苦蕒菜なり、と。按ずるに蕒は音買、今多く訛りて蕒に作る）」とある。

(九) 正月篇、申包胥曰人定則勝天、定誤衆 小雅、祈父之什「正月」の四章「既克有定、靡人弗勝。（既に克く定まる有らば、人に勝たざる靡けん）」の『集伝』に、「申包胥曰、人衆則勝天、天定亦能勝人。（申包胥曰はく、人衆ければ則ち天に勝ち、天定まりて亦た能く人に勝つ、と）」とあるのを指す。集註本、宋版も「衆」に作る。『遺音』には、「正月篇、靡人弗勝。集傳、

申包胥曰、人定則勝天。按定字今誤作衆。（正月篇に、人として勝たざる靡けん、と。集伝に、申包胥曰はく、人定まれば則ち天に勝つ、と。按ずるに定の字は今誤りて衆に作る）」とある。この句は、『史記』卷六十六「伍子胥列伝」に、「申包胥亡於山中、使人謂子胥曰、子之報讐、其以甚乎。吾聞之、人衆者勝天、天定亦能破人。今子故平王之臣、親北面而事之。（申包胥山中に亡げ、人をして子胥に謂はしめて曰はく、子の讐に報ゆる、其れ以て甚しきや。吾れ之を聞けり、人衆き者は天に勝ち、天定まるも亦た能く人を破る。今子故と平王の臣、親ら北面して之に事ふ）」とあるのに拠る。また、蘇轍の『詩集伝』卷十一、小雅「正月」に、「民方在危殆之中、視天夢夢若無能爲者。不知此天理之未定故也。……人未有不爲天所勝者。申包胥曰、人衆則勝天、天定亦能勝人。而老子以爲天網恢恢、疎而不失。不然、天豈有所憎而禍之耶。適當其未定故耳。（民方に危殆の中に在るに、天を視れば、夢夢として能く爲す無き者の若し。此の天理の未だ定まらざるを知らざるが故なり。……人未だ天の勝つ所を爲さざる者有り。申包胥曰はく、人衆なれば則ち天に勝ち、天定まれば亦た能く人に勝つ、と。而して老子に以爲らく、天網は恢恢、疎にして失はず、と。然らずんば、天豈に憎む所有りて之を禍ひせんや。適に其の未だ定まらざるに当た

るが故なるのみ」とあり、朱熹は蘇轍の説を踏まえている。

(一〇) 小弁篇、江東呼爲鴨鳥、鴨誤鴨 小雅、小旻之什「小弁」の一章「弁彼鸛斯、歸飛提提。(弁たる彼の鸛斯、歸り飛んで提提たり)」の『集伝』に、「鸛、雅鳥也。小而多羣、腹下白。江東呼爲鴨鳥。(鸛は、雅鳥なり。小にして群れ多く、腹の下白し。

江東呼びて鴨鳥と爲す)」とある。集註本は「鴨」に作り、宋版は「鴨」に作る。『遺音』に、「小弁篇、弁彼鸛斯。集傳、江東呼爲鴨鳥。按鴨音匹、字從卑旁。此本爾雅註文。今誤作鴨。

(小弁篇に、弁たる彼の鸛斯、と。集伝に、江東呼びて鴨鳥と爲す、と。按ずるに鴨は音匹、字は卑の旁に従ふ。此れ爾雅の註文に本づく。今誤りて鴨に作る)」とある。

(十一) 巧言篇、君子不能聖讒、聖誤聖 小雅、小旻之什「巧言」

の三章「君子信盜、亂是用暴。(君子盜を信ず、亂是用て暴なり)」の『集伝』に、「言君子不能已亂、而屢盟以相要、則亂是用長矣。君子不能聖讒、而信盜以爲虐、則亂是用暴矣。(言ふところは君子亂を已む能はずして、屢しば盟ひて以て相ひ要すれば、則ち亂是用て長ず。君子讒を聖むこと能はずして、盜を信じて以て虐を爲せば、則ち亂是用て暴なり)」とある。

集註本、宋版も「聖」に作る。『遺音』に、「巧言篇、君子信盜。

集傳、君子不能聖讒。按聖字是聖字之譌。在力反、疾也。(巧

言篇に、君子盜を信ず、と。集伝に、君子讒を聖むこと能はず、と。按ずるに聖の字は是れ聖の字の訛りなり。在力の反、疾なり)」とある。

【七】蓋五經之中、惟詩易讀、習者十恆七八。故書坊刊版亦最夥、其輾轉傳譌亦爲最甚。今悉釐正、俾不失眞。至其音叶、朱子初用吳棫詩補音。「案棫詩補音與所作韻補爲兩書。書録解題所載甚明。經義考合爲一書、誤也。」其孫鑑又意爲增損、頗多舛迕。史榮作風雅遺音、已詳辨之。茲不具論焉。

〔校勘〕

- ① 書前提要是、「八九」に作る。
- ② 書前提要ならびに殿版は、「板」に作る。
- ③ 書前提要是、「釐正之」に作る。
- ④ 書前提要ならびに殿版は、「悞」に作る。
- ⑤ 書前提要是、「辯」に作る。
- ⑥ 書前提要是、後に「乾隆四十二年十月恭校上」とある。

〔訓読〕

蓋し五經の中、惟だ詩のみ読み易く、習ふ者十に恒に七八。故に書坊の刊版も亦た最も夥しく、其の輾転して訛りを伝ふることも亦た最も甚しと爲す。今悉く釐正し、真を失はざらしむ。其の音叶に至りては、朱子初め呉棫の詩補音を用ふ。「案ずるに棫の詩補音と作る所の韻補とは両書と爲す。書録解題に載する所甚だ明らかなり。經義考合はせて一書と爲すは、誤りなり。」其の孫鑑又た意もて増損を爲すも、頗る舛辻多し。史榮風雅遺音を作り、已に詳らかに之を辨ぜり。茲に具さに論ぜず。

#### 〔現代語訳〕

おもうに、五經の中で、ただ『詩』だけが読誦し易く、これを習う者は、十のうち常に七、八を占めるほどであつた。それゆゑに書肆の出版も同様に最も数が多く、その何度も繰り返し誤脱を伝え広めることも、やはり非常に多いのである。今、ことごとくこれを校正し、読者に真実を見失わないようにさせた次第である。『詩集伝』の叶音について、朱子は初め呉棫の『詩補音』の説を用いていた。「おもうに、呉棫の『詩補音』と同じく著した『韻補』とは二書である。そのことについては『直齋書録解題』の記載からも明らかである。しかし、『經義考』がこれを合わせて一書と見なしているのは誤りである。」朱子の孫である朱鑑は、自

らの考えによつてさらに増減を行ったが、これにはたいへん錯誤が多く見られる。そこで史榮は『風雅遺音』を著し、十分にこれを詳らかに辨正した。したがつてここでは一々論ずることはしない。

#### 〔注〕

(一) 十恒七八 十のうち七、八割を占めている。『晋書』卷三十四「羊祜伝」に、「祜歎曰、天下不如意、恒十居七八。故有當斷不斷、天與不取、豈非更事者恨於後時哉。(祜歎じて曰はく、天下意の如くならざること、恒に十に七八に居る。故に當に斷ずべきに斷ぜず、天与ふるに取らざること有らば、豈に事を更むる者の後時に恨むこと非ざらんや)」。

(二) 輾轉 『毛詩』周南「關雎」の「輾轉反側す」、陳風「沢陂」の「輾轉枕に伏す」に見える語であるが、ここでは何度も反復して定まらない、ころころと立場を変える意。『後漢書』卷十五「李王鄧來列伝」(來歴伝)に、「歴佛然、廷詰皓曰、屬通諫何言。而今復背之。大臣乗朝車、處國事。固復輾轉若此乎。(歴佛然として、廷にて皓を詰りて曰はく、屬ごろ通諫せんとは何の言ひぞ。而るに今復た之に背くとは。大臣は朝車に乗り、國事に處る。固に復た輾轉すること此くの若きか)」とあり、李賢は「輾轉、不定也。(輾轉は、定まらざるなり)」と注

する。

(三) 釐正 きちんと改め正す。校訂する。唐、孔穎達『毛詩正義』序に、「先君宣父、釐正遺文、緝其精華、褫其煩重、上從周始、下暨魯僖、四百年間、六詩備矣。(先君宣父、遺文を釐正し、其の精華を緝め、其の煩重を褫き、上は周の始め従り、下は魯の僖に暨ぶまで、四百年間、六詩備はれり)」。

(四) 吳棫 ? 南宋、高宗、紹興二十四年(一一五四)。字は才老。建安の人、一説に舒州の人。宣和六年(一一二四)、進士に及第し、試館職に召されたが就かなかった。のち紹興年間(一一三一―一一六一)には、太常丞となった。毛仁仲の妻を娶り、彼の依頼で政治を風刺する上奏文の代筆を行ったが、それが時の宰相であつた秦檜の逆鱗に触れることとなり、泉州通判に左遷され、そのまま一生を終えた。著に『書裨伝』十二卷、『詩補音』十卷、『論語指掌考異統解』十二卷、『楚辞釈音』十卷、『韻補』五卷がある(以上『宋志』に拠る)。伝は『宋史』には見えず、わずかに伝える資料としては、南宋、徐蔵「詩補韻序」(朱彝尊『經義考』卷一百五、詩八「毛詩叶韻補音」所引)、南宋、王明清『揮塵三録』(卷三)、『宋元学案』(卷二十二、景迂学案「常吳先生棫」)があるのみである。なお、吳棫の音韻学方面の研究としては、

張氏権氏『宋代古音学与吳棫《詩補音》研究』(『中国語言学文庫』第三輯、商務印書館、二〇〇五年)

がある。本書は、上編において、古代から宋代に至るまでの音韻学研究史、吳棫の音韻学、その伝記を明らかにし、下編において、『詩補音』の輯佚と校注を『詩総聞』(王質)、『集伝』、『韻補』等の引用資料を頼りに試みた労作である。また、吳棫をはじめ、周辺の協音説については、

頼惟勤氏「清朝以前の協音説について」(『お茶の水女子大学人文科学紀要』第八卷、一九五六年、のち『中国音韻論集』「頼惟勤著作集I」、汲古書院、一九八九年、に収む)に詳しい。

(五) 詩補音 十卷。佚。書名については、『宋志』(卷二百二、詩類)は「毛詩叶韻補音」とし、『書録解題』(卷二、詩類)では「毛詩補音」とし、『經義考』(卷一百五、詩八)では「毛詩叶韻補音」とし、「存」という。その詳しい内容や協音の方法については、張氏、頼氏の前掲書・論文を参照。また、本書が『韻補』とともに、朱熹の『集伝』の協音説の拠り所となったことは、『語類』卷八十「綱領」に、「叶韻多用吳才老本。或自以意補入。(叶韻は多く吳才老の本を用ふ。或いは自ら意を以て補入せり)」とあり、また「問、詩叶韻、有何所據而言。曰、

叶韻乃吳才老所作、某又續添減之。蓋古人作詩皆押韻、與今人歌曲一般。今人信口讀之、全失古人詠歌之意。（問ふ、詩の叶韻、何の拠る所有りて言ふや。曰はく、叶韻は乃ち吳才老の作りし所にして、某又た續ぎて之を添減す。蓋し古人詩を作れば皆な押韻し、今人の歌曲と一般なり。今人口に信せて之を讀めば、全く古人の詠歌の意を失ふ）とあることから知られる。

（六）韻補 五卷。『周易』、『尚書』、『毛詩』から宋の歐陽脩、蘇軾、蘇轍に至るまでの五十種の資料から協音の用例を選び出し、それを文字ごとにまとめ、さらにそれらを上平、下平、上声、去声、入声の五つに部分けしている。古音を論じた初めての体系的な典籍であり、後世多くの人がこれに拠ることとなった。とりわけ、清、顧炎武が本書を高く評価し、『韻補正』一卷を著し、その誤りを訂正している。『提要』卷四十二、經部「小学類三」に著録する。

（七）書録解題所載甚明 『書録解題』では『詩補音』と『韻補』を別々に著録しており、「韻補五卷」（卷三、經解類）の解題に、「朱侍講多用其說於詩傳楚辭注、其爲書詳且博矣。又有毛詩補音一書、別見詩類、大歸亦若此。（朱侍講其の説を詩伝・楚辭注に用ふること多く、其の書爲るや詳らかにして且つ博し。又た毛詩補音の一書有り、別に詩類に見ゆ、大いに帰すること亦

た此くの若し）」という。

（八）經義考合爲一書 『經義考』卷一百五、詩八に、「吳氏〔栻〕毛詩叶韻補音。宋志十卷。存。」とあるが、『韻補』については著録されていない。おそらく朱彝尊はこれが一書であると見なしていたのであろう。

（九）其孫鑑又意爲増損、頗多舛辻 「鑑」は、朱鑑（一一九〇—一二五八）を指す。字は子明。徽州婺源の人。朱熹の孫。官は奉直大夫、湖広総領に進んだ。著に『朱文公易說』二十三卷（朱熹撰、朱鑑輯）、『詩伝遺說』六卷がある。その名は『宋元学案』卷四十九、晦翁学案下「晦翁家学」に見える。『詩伝遺說』は、「綱領」、「序辨」、「六義」、「国風」、「雅頌」、「逸詩」、「詩楽」、「叶韻」の八篇から成り、『集伝』の不備を補うべく著された。『提要』卷十五「詩類一」に著録する。朱鑑はその序において次のごとくいう。

先文公詩集傳、豫章長沙後山皆有本、而后山本讎校爲最精。第初脱藁時、音訓間有未備、刻版已竟、不容増益。欲著補脱、終弗克就。未免仍用舊版、葺爲全書補綴。……今文集書問語錄所記載、無慮數十百條。彙次成編、題曰遺說。

（先に文公の詩集伝は、豫章・長沙・後山皆な本有り、而して后山本の讎校最も精なりと爲す。第だ初め稿を脱せし時、

音訓間未だ備はらざる有り、刻版已に竟はり、増益す容からず。補脱を著はさんと欲するも、終に就す克はず。未だ仍ほ旧版を用ひ、葺して全書の補綴を為すを免れず。……今文集・書問・語録に記載する所、数十百條を慮る無し。彙次して編を成し、題して遺説と曰ふ)

これに対して、史榮は『遺音』の自序において次のごとく批判する。

間於朱竹垞經義考、見有文公後人朱鑑所作詩傳遺集後序。乃知當時本有音而未備。然則今之音、蓋不知誰何人、因其未備、妄取世俗譌誤之音、竄入其間也。又觀邨風註、或無音切、而汎云與某同。及坊刻所引京本、則知今音不成於一手。又即朱子舊有者、而亦妄改之也。流傳數百年、世儒咸信爲朱子手定、而莫知其誤。即知之亦莫敢言。不已誣乎。

(間)ごろ朱竹垞の經義考に於いて、文公の後人朱鑑の作りし所の詩傳遺集の後序有るを見る。乃ち當時の本に音有るも未だ備はらざるを知る。然らば則ち今の音は、蓋し誰何の人なるかを知らず、其の未だ備はらざるに因り、妄りに世俗の訛誤の音を取りて、其の間に竄入せるならん。又た邨風の註を観るに、或いは音切無く、而して汎く某と同じと云ふ。坊刻に引く所の京本に及んでは、則ち今の音一手に成らざるを知

る。又た即ち朱子の旧有の者、而して亦た妄りに之を改むるなり。流传すること數百年、世儒咸な信じて朱子の手定と爲し、而して其の誤りを知る莫し。即ひ之を知るも亦た敢へて言ふ莫し。已だ誣ならざらんや)

なお、『提要』の「詩傳遺説」にも、「國朝寧波史榮撰風雅遺音、據鑑此序、謂今本集傳音叶、多鑑補苴、非朱子所手定。其説似非無因。然則以音叶之誤議朱子、與以朱子之故、而委曲回護吳棫書者、殆均失之矣。(國朝寧波の史榮 風雅遺音を撰し、鑑の此の序に拠りて、今本の集傳の音叶は、鑑の補苴多く、朱子の手定する所に非ずと謂ふ。其の説因る無きに非ざるに似たり。然らば則ち音叶の誤りを以て朱子を議すると、朱子の故を以て、委曲に吳棫の書を回護する者とは、殆んど均しく之を失せり)」との史榮の言を引いた批判が見える。

#### 〔追記〕

本稿を成すにあたり、本学名誉教授向嶋成美先生にご指導を賜りました。先生にはご多忙のなか、拙稿に対して懇切丁寧なご批評、ご教示を賜りました。この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

(筑波大学大学院人文社会科学科博士課程)